

山梨県南アルプス市

平成15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書

Doudou Uehatta

百々・上八田遺跡

各種開発工事に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書
個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005. 3

南アルプス市教育委員会

例　　言

1. 本書は山梨県南アルプス市において平成15・16年度に実施した埋蔵文化財試掘調査報告書である。
2. 本事業は国宝重要文化財等保存整備費補助・山梨県文化財関係補助金を受け、南アルプス市教育委員会が実施した。
3. 調査は田中大輔、斎藤秀樹、保阪太一が担当した。
4. 本書の執筆は第Ⅱ章5、8は田中、第Ⅱ章6は保阪、それ以外は斎藤が担当し、編集は小林素子、斎藤が行った。
5. 整理作業には、飯室めぐみ、加藤由利子、神田久美子、久保田幸恵、小林、桜井理恵、廣瀬源春、古郡明、穂坂美佐子、山路宏美、山本愛が参加した。
6. 本調査で得られた出土品およびすべての記録は、南アルプス市教育委員会に保管してある。
7. 試掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。（敬称略・五十音順）
小野正文、櫛原功一、森原明廣、帝京大学山梨文化財研究所、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター

凡　　例

1. 遺構および遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

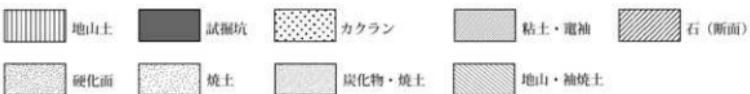
遺構　平・断面図・・・・・・1/40、1/60、1/100

住居址、竈・・・・・・1/40、1/30

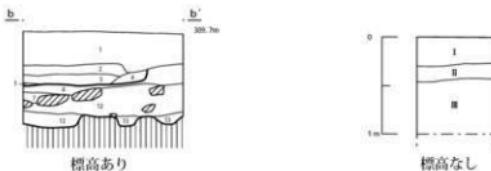
遺物　土器、鉄滓・・・・・・1/3

石器・・・・・・1/4

2. 遺構図中で使用したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。



3. 遺構の断面図、基本層序図における「309.7m」等の数値は標高を表す。また試掘調査時レベルを使用せず、地表から簡易的に測量した断面図には縦のスケールのみ表記した。



4. 遺物分布図におけるドットは次の遺物を表す。

土器・・・・・・・● 石器・・・・・・・■

骨片・・・・・・・△ 鉄滓・・・・・・・□

5. 土器の口縁部または底部の残存率が1/4以下の破片資料については、正確な口径が求められないため断面図の右側に外面を、左側に内面を書き表現した。

6. 挿図中の遺物番号、観察表、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

7. 本書で用いた地図は、国土地理院発行の地形図(1/25,000)、旧八田村、白根町、若草町、櫛形町発行の都市計画図(1/2,500)、南アルプス市発行の地形図(1/10,000)である。一部加筆、縮尺を変更している。

8. 試掘調査位置図は都市計画図を基に作成し、縮尺は平成15年度寺部村附遺跡他のみ1/10,000で、その他は1/5,000である。トレンド配置図の縮尺は建築範囲に合わせて決定しているため統一しておらず、それぞれスケールを明記した。

目 次

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 平成 15・16 年度試掘調査概要	1
1. 調査概要	1
2. 今後の課題	4
第Ⅱ章 平成 15 年度遺跡試掘調査概要	6
1. 坂ノ上姥神遺跡	6
2. 長谷寺遺跡	7
3. 前畠遺跡	8
4. 徳永・御崎遺跡第 2 地点	9
5. 寺部村附第 6 遺跡（第Ⅱ地点）	16
6. 御勅使川堤防址群	17
7. 寺部村附遺跡他	18
8. 寺部村附第 6 遺跡（第Ⅲ地点）	19
9. 徳永・御崎遺跡第 3 地点	20
第Ⅲ章 平成 16 年度遺跡試掘調査概要	29
1. 野牛島・立石下遺跡（野牛島 2623 他）	29
2. 野牛島・立石下遺跡（野牛島 2592 他）	30
3. 加賀美条里遺構	31
4. 辻遺跡	35
第Ⅳ章 百々・上八田遺跡発掘調査報告	38
第 1 節 調査に至る経緯と経過	38
第 2 節 地理・歴史環境	38
第 3 節 発見された遺構と遺物	43
第 4 節 総括	48

第Ⅰ章 平成15・16年度試掘調査概要

1. 調査概要

甲府盆地西側に位置する南アルプス市は、平成15年4月1日に八田村、白根町、芦安村、若草町、櫛形町、甲西町の6町村が合併して誕生した。総面積264.06km²、山梨県の面積の約5.9%にあたり、そのうち約11%が農用地、約73%が西部地域に広がる森林原野である。

人口は約7万2千人を数える。合併後、澄んだ空気や緑をイメージさせる「南アルプス市」の名称や中部横断自動車道（甲西バイパス）の白根IC、南アルプスICの開通等に見られる道路整備による影響からか、宅地開発が増加している。また、合併以前はそれぞれ別の商圏と考えられてきたものが、合併により市内がひとつの商圏として捉えられ、大型ショッピングセンターの出店が相次いでいる。

各種開発の増加に加え、文化財保護部局と都市計画・建設部局との情報の共有化と埋蔵文化財取り扱いフローの構築により、市の文化財保護法57条の2および3（法改正のため平成17年4月1日からそれぞれ93条、94条となる）の処理件数は合併前の約4倍となった。平成15、16年度は急増する事務処理とともに、試掘調査、立会調査など各種開発への迅速な対応に迫られた2年間であった。試掘調査は合併前と比較して増加し、平成15年度は47件、16年度は34件の調査を実施した。

調査原因から傾向を見てみると、宅地開発の増加に呼応して「宅地造成・分譲工事」が平成15、16年度合わせて26件と多く、全体の約3割を占める。次いで個人住宅建設が多く、平成15年度には12件の試掘調査を実施した。主に浄化槽部分の調査であるが、徳永・御崎遺跡では古墳時代後期や平安時代の住居址とともに、その下層から縄文時代後期の敷石住居址が発見されるなど、調査面積が少ない中で貴重な資料を得ることができた。

試掘調査地点を地区別に見てみると、①野牛島地区、②徳永地区、③加賀美地区、④小笠原・山寺地

調査原因		15年度	16年度	合計
公共事業	道路	3	3	6
	学校	2	0	2
	公共施設	2	1	3
	小計	7	4	11
民間事業	個人住宅	12	2	14
	個人住宅兼店舗	2	1	3
	集合住宅	1	4	5
	工場	0	2	2
	店舗	8	3	11
	宅地造成・分譲	13	13	26
	倉庫	1	2	3
	駐車場	1	0	1
	その他	2	3	5
小計		40	30	70
合計		47	34	81

第1表 平成15・16年度試掘調査原因一覧

第2表 平成15年度試掘調査一覧

No.	道路名・試掘名	調査地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	トレンチ数	清 極	透物	調査期間	調査所見
1	新潟市川岸野透跡	横手 136-31	221.2	6	1	なし	なし	2003年5月14日	個人住宅
2	鶴河 039-1340-2	鶴河 039-1, 843-2	135	105	2	なし	なし	2003年5月16日	宅地造成(分譲住宅)
3	鶴河 079-1	鶴河 079-1	4,470	234	6	なし	なし	2003年5月16日	透跡
4	志田原第A透跡	志田原 071-1	1,190	13.6	2	なし	なし	2003年5月22日	宅地造成(分譲住宅)
5	若叶・上八田透跡	上八田 495-1	454.4	8.55	3	なし	なし	2003年6月10日	個人住宅
6	鶴城町 2525	鶴城町 2525-1	1,237.8	13	2	なし	なし	2003年6月11日	宅地造成(分譲住宅)
7	新潟川岸野透跡	上栗野 711	273.1	2	1	なし	なし	2003年6月17日	個人住宅
8	往還第C透跡	小字原 137-2他	1,302	16.25	2	なし	なし	2003年6月23日	宅地造成(分譲住宅)
9	村北第2透跡	寺前 1479, 1480	2,740	59	5	なし	古墳跡	2003年7月3, 4日	古墳跡調査
10	大綱瀬井保透跡	大綱瀬井 1他	2,984	140.32	6	なし	土壌	2003年7月16日～18日	透跡
11	加賀美赤堀透跡	加賀美 230-1	433.5	17.5	1	なし	なし	2003年7月20日	透跡
12	坂上津波透跡	横手 1956-1	1,168	20.25	2	土壌, 鹿児原	土壌	2003年7月20日～7月21日	宅地造成(分譲住宅)
13	加賀美鬼室透跡	加賀美 1226-1他	1,126	17.6	2	なし	なし	2003年8月5日	宅地造成(分譲住宅)
14	野牛面・西ノ浦透跡	野牛面 2622-他	558.4	5.2	1	なし	なし	2003年8月7日	個人住宅
15	若叶・上八田透跡	上八田 191	636	6.8	2	なし	なし	2003年8月12日	個人住宅
16	森谷川透跡	横手 45-5他	131.19	12.6	1	溝	なし	2003年8月18, 19日	作業場
17	新潟透跡	山中 70-2, 80-1	631.42	12	1	溝	土壌層2点(表面)	2003年8月22日	個人住宅
18	新潟透跡下透跡	十日市堀 739	930	10	1	なし	なし	2003年8月28日	宅地造成(分譲住宅)
19	新潟南第1透跡	十日市堀 1953-1, 1582-2	212.4	16.95	3	なし	なし	2003年9月19日	新潟シタク
20	加賀美高須透跡	加賀美 2374-1	408.8	6.8	2	なし	なし	2003年9月9日	個人住宅
21	鶴城北4号地透跡	下栗野 559他	1,067	29.48	6	土壌	土壌層・波状層	2003年10月15, 16日	透跡場
22	新潟透跡川原野透跡	野牛面 1882-57, 1882-121	691.7	5.4	1	なし	なし	2003年10月20日	個人住宅兼店舗
23	春田川透跡	平岡 1855	427	27.36	3	ピット	なし	2003年10月23日～28日	個人住宅
24	上栗野透跡 1723-3他	上栗野透跡 1723-3他	1,340.18	17	2	なし	なし	2003年11月13日	宅地造成(分譲住宅)
25	在栗屋 471他	在栗屋 471他	65,251	579	15	なし	なし	2003年11月17日～12月8日	大型透跡
26	鶴野 3475-5他	鶴野 3475-5他	979	11.7	2	なし	土壌層2点(表面)	2003年12月2日	個人住宅兼店舗
27	横手・鶴城透跡第2点	横手 1672-1	4,966	11.35	2	骨頭	土壌層・鰐文土層	2003年12月9日～19日	個人住宅
28	御所透跡群	百引 1726-11	1,365	8	1	なし	なし	2003年12月5日	宅地造成(分譲住宅)
29	寺前町野6地點(第3地点)	寺前 1666他	630	18.9	6	溝, 波状層	土壌, 中世	2003年1月10, 11日	透跡
30	新潟透跡(横手透跡)	六日 1716-12, 1758-11	156	4.8	1	壁	なし	2003年12月11日	新潟透跡(横手)
31	新潟透跡 3611-2	新潟透跡 3611-2	1,174.3	10	1	なし	なし	2003年12月19日	宅地造成(分譲住宅)
32	上栗野透跡 13-3他	上栗野透跡 713他	12,172	3	1	なし	なし	2003年12月22日	透跡
33	鶴野 2568-2他	鶴野 2568-2, 2589-4	616	12.2	2	土壌?	なし	2004年1月7日	透跡
34	加賀美鬼室透跡	神代 983-1他	1,034	5	1	なし	なし	2004年1月16日	宅地造成(分譲住宅)
35	新潟透跡	十日市堀 634-3	498.67	4	1	なし	なし	2004年1月22日	個人住宅
36	新潟透跡(横手透跡)	六日 624-3	4,900	4.8	1	なし	なし	2004年1月26日	集合住宅
37	新潟透跡第2透跡	十日市堀 143-1他	645	0.6	2	なし	なし	2004年2月4日	宅地造成(分譲住宅)
38	新潟透跡(横手透跡)	野牛面 2339-8	3,274.6	35	1	なし	なし	2004年2月5日	透跡
39	野牛面・西ノ浦透跡	野牛面 2636	20	13.4	1	なし	なし	2004年2月6日	透跡シート
40	寺前町野10-11透跡, 真力原第1-2透跡, 朝日神社用古道透跡	寺前 081他	121,000	124	31	窓穴, 波状層, 漆狀透層	古墳跡網・中世土層	2004年2月12日～3月31日	大型透跡
41	新潟透跡	横手 262他	7,200	253.4	12	ピット	なし	2004年2月23日～3月8日	透跡
42	新潟透跡	新潟透跡	1,500	60	2	なし	なし	2004年2月25, 26, 27日	透跡
43	新潟透跡, 清水透跡	吉坂 150他	4,162	102.5	6	溝透層	古墳跡	2004年3月8日～10日	古墳跡調査
44	寺前町野6透跡(第3地点)	寺前 1924-7他	497	50	4	溝の透層, 土壌	土壌層・中世	2004年3月10, 11日	透跡

No.	道跡名・試験名	調査地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	トレンチ数	遺構	遺物	調査期間	調査原因
45	勝手・御崎通跡第3地点	勝手 1664-2	178.04	7	1	窓穴住居・廻り住居	縄文土器・土師器	2004年3月9日～22日	個人住宅
46	下今田跡 270-1 他	下今田跡 270-1 他	1,302	23	1	なし	土師器	2004年3月11日	宅地造成(分譲住宅)
47	花ノ上終沖通跡	勝手 1633 他	132	9.08	1	廻り住居	土師器・中骨	2004年2月10日、3月26日	個人住宅

第3表 平成16年度試掘調査一覧

No.	道跡名・試験名	調査地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	トレンチ数	遺構	遺物	調査期間	調査原因
1	勝手・立石下通跡	勝手町 2621 他	726.79	15.1	3	廻り住居場	土師器	2004年4月21日	宅地造成(分譲住宅)
2	勝手町 2263-1 他	勝手町 263-1 他	3,213	89.8	2	(廻り住居)	なし	2004年5月19日	宅地造成(分譲住宅)
3	豪利・御前足跡	下今田跡 107-1 他	11,500	106.28	5	なし	なし	2004年6月21、24日	自動車学校
4	三井通跡	三井 1280-1	975.14	2.4	1	なし	なし	2004年7月14日	個人住宅(借家)
5	勝手町 127-1, 128	勝手町 127-1, 128	626.5	8.7	2	なし	なし	2004年8月9日	工事
6	勝手町・立石下通跡	勝手町 2592 他	1,085	23.8	2	廻り住居場	なし	2004年8月23日	集合住宅
7	船河原跡	船河原 505	36.5	17.5	1	テントピット7+所	なし	2004年9月10日	物置
8	芦野跡 1027 他			23.7	1	なし	なし	2004年9月8日～10日	道路
9	市田 1104-1 他	市田 1104-1 他	4,301	94.18	7	なし	なし	2004年9月12日～14日	宅地造成(分譲住宅)
10	勝手町・立石下通跡	勝手町 2618 他	1,342	62.8	4	なし	なし	2004年9月13日	宅地造成(分譲住宅)
11	山寺 260-5	山寺 260-5	1,135	21.76	2	なし	なし	2004年9月15日	宅地造成(分譲住宅)
12	小笠原跡(既往A)	小笠原 743-1	376.1	1.0	1	なし	なし	2004年10月13日	個人住宅
13	西河 1138-1, 1140	西河 1138-1, 1140	1,103	5.4	2	なし	なし	2004年10月22日	集合住宅
14	加賀美系通塙跡	加賀美 2011-2, 2011-3	998.8	10	1	坑列	なし	2004年11月8日	個人住宅(店舗)
15	勝手町・山岸通跡	勝手町 277-1 他	1,527	40.01	3	なし	なし	2004年11月16日、12月2日	造成
16	吉田 1268-1 他	吉田 1268-1	363.3	5.65	1	なし	なし	2004年11月17日	宅地造成(分譲住宅)
17	市下通跡	市下 354-2 他	591.2	5.6	1	なし	なし	2004年11月17日	事業所
18	庄屋敷通跡	下今田 26-1	2,899.6	19.6	3	なし	なし	2004年11月22日	宅地造成(分譲住宅)
19	城原 145-1	城原 145-1	2,243.4	16.92	2	廻り住居場	なし	2004年12月6日	店舗
20	下今田 1118 他	下今田 1118 他	64,423.7	333.2	11	なし	なし	2004年12月13日～15日	工事
21	元加賀美系通塙跡	加賀美 2091-1	718	4.08	1	なし	なし	2004年12月17日	宅地造成(分譲住宅)
22	城原 1690-1 他	城原 1690-1 他	2,894	4.48	1	なし	なし	2004年12月24日	店舗
23	上八田 222-1 他	上八田 222-1 他	1,139	1.6	2	なし	なし	2005年1月12日	宅地造成(分譲住宅)
24	庄屋敷 2040 他	庄屋敷 2040 他	2,899	20	3	廻り住居場	なし	2005年1月26日	道路
25	新御前(即)御物仕上跡	内科 1019-8 他	1,954	23.6	4	なし	なし	2005年1月26日	店舗
26	西野 2319-1, 2336-1	西野 2319-1, 2336-1	1,385	17.1	1	なし	なし	2005年2月1日	集合住宅
27	吉田 179-1 他	吉田 179-1	365.7	17.67	2	なし	なし	2005年2月2日	集合住宅
28	加賀美系通塙跡	加賀美 2010-3 他	2,311	79.37	2	廻り住居場・廻り住居1	五・輪形器	2005年2月10日～22日	宅地造成(分譲住宅)
29	加賀美系通塙跡	加賀美 2225 他	1,025	6.8	1	(廻り住居)	なし	2005年2月22日	宅地造成(分譲住宅)
30	勝手 1620-1	勝手 1620-1	395	16.2	1	なし	なし	2005年2月23日	宅地造成(分譲住宅)
31	加賀美系通塙跡	加賀美 2360-2	936.8	4.42	1	本居跡	土師器土器	2005年3月14日	個人住宅
32	加賀美系通塙跡	加賀美 2277-1, 3255-1	1,152	6.2	1	なし	なし	2005年3月16日	看板
33	庄屋敷	山寺 390 他	1,227	56.91	5	廻り住居・本居	土師器	2005年3月17日～24日	宅地造成(分譲住宅)
34	小笠原 780 他	小笠原 780 他	46.48	5	なし	なし	式土瓶器・土瓶萬士器	2005年3月22日～24日	市道

第4表 平成16年度発掘調査一覧

No.	道跡名・試験名	調査地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	トレンチ数	遺構	遺物	調査期間	調査原因
1	西野・上六田通跡	上六田 430-3	#022	47.12	1	廻り住居・廻り住居	土師器・甕	2004年10月25日～11月11日	個人住宅

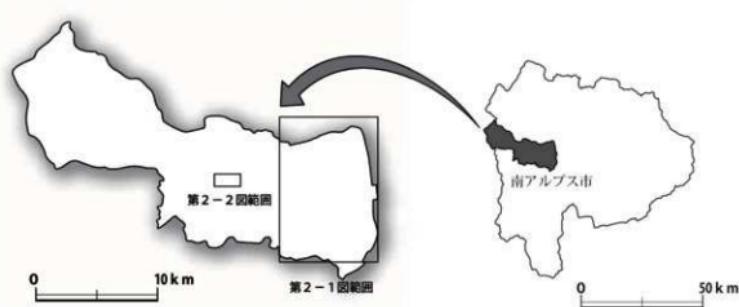
区の4地区に宅地開発が多く、試掘調査地点が集中している。

試掘調査から本調査に進んだ件数は平成15年度では3件あり、2件が県道および市道の公共事業、残り1件が民間の宅地分譲計画に伴うものである。平成16年度では1件で、土壤改良を行う個人住宅の建設に伴い本調査を実施した。なおその調査結果は、本書第IV章日々・上八田遺跡発掘調査報告にまとめてある。

2. 今後の課題

合併した旧6町村のなかで、白根地区および芦安地区では遺跡の分布調査が行われておらず、精度の高い遺跡地図が整備されていない状態であった。遺跡地図の整備は、各種開発から埋蔵文化財を保護するだけでなく、開発事業を円滑に実施するうえで最も重要かつ基礎的な資料である。旧町村レベルでの地図精度の格差は、住民サービスの点からも公平性を欠いており、早急な対応が必要であった。市教育委員会ではこの現状を是正するために、合併直後の平成15年度から3カ年計画で白根・芦安地区的遺跡詳細分布調査を実施することを決定した。平成17年3月現在、白根地区的分布調査をほぼ完了している。こうした分布調査に加え、芦安、白根地区においても開発行為が行われる場合、工事主体者と協議の上試掘調査を実施し、埋蔵文化財の把握に努めた。試掘件数は平成15、16年度で合計81件にのぼる。現在、分布調査および試掘調査資料を基に白根・芦安地区的遺跡地図を整備中である。

南アルプス市内では今後さらに民間の各種開発が増加すると予想される。各種開発との迅速な調整と文化財の保護を図るために、市内の埋蔵文化財の性格、密度、埋没状況等をより細かく把握し、その資料をデータベース化して情報をすばやく引き出すシステムも重要である。また試掘調査で得られた資料は、遺跡地図の基礎資料だけでなくそれ自体が地域の歴史を物語るテキストであり、広く住民に周知することは、情報公開の観点からも、今後さらに市行政が進めるべき重要な責務であろう。



第1図 南アルプス市位置図 (1/40万、1/200万)



第2図 試掘調査地点位置図 (1/50,000)

第Ⅱ章 平成15年度遺跡試掘調査概要

1. 坂ノ上姥神遺跡

調査地 德永字坂ノ上 1855、1856、1956-1

調査原因 宅地造成(分譲住宅)

調査期間 平成15年7月31日～8月1日

平成16年2月10日

平成16年3月26日

対象/調査面積 1168 m²/ 29.33 m²

調査概要

調査区は御動使川扇状地扇端部に位置する。調査区の東側には扇状地と釜無川氾濫原を区画する浸食崖が南北に走り、遺跡はこの崖上に立地する。本遺跡が立地する扇状地扇端部は遺跡が集中する地域であり、調査区の南側には縄文時代後期の敷石住居や古墳時代後期の竪穴式住居が発見されている徳永・御崎遺跡や金丸氏の館跡である長盛院遺跡が位置する。

試掘調査は、まず宅地造成全体を対象とした調査を行い、個人住宅の建設決定後、浄化槽部分の調査を実施した。

(1) 1次調査

道路計画部分に合計2本のトレンチを設定した。調査の結果、第1トレンチで土坑、竪穴住居址、第2トレンチで土坑を検出した。遺構確認面は地表から約40cmの地点である。

調査結果を踏まえ、開発主体者と協議した結果、3区画予定された宅地部分は遺跡まで30cm以上の保護層が確保されるため現状保存とし、遺構に影響が及ぶ道路調査部分を対象とした本調査の実施を決定した。

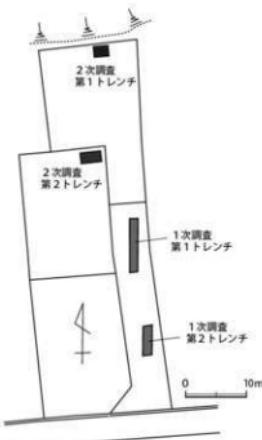
本調査は坂ノ上姥神遺跡調査団が行い、平成15年9月3日から9月29日まで実施した。調査成果は、平成17年度に報告書としてまとめられる予定である。

(1) 2次調査

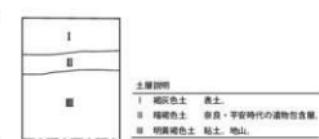
3区画の分譲住宅の浄化槽部分のうち、1カ所で立会調査、2カ所で試掘調査を実施した。その結果、第1トレンチで溝状遺構、第2トレンチで土坑を発見した。



第3図 調査地位置図



第4図 坂ノ上姥神遺跡トレンチ配置図 (1/800)



第5図 基本層序 (1/40)

2. 長谷寺遺跡

調査地 横原 453-5、453-6、453-7

調査原因 作業場建設

調査期間 平成15年8月18、19日

対象／調査面積 151.19 m² / 12.4 m²

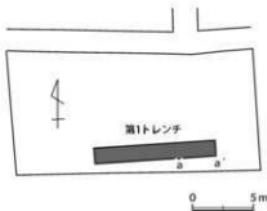
調査概要

調査区は御使使川扇状地扇央部に位置する。調査区の南70mの地点には平安時代中頃に造られた十一面観音立像を本尊とする古刹長谷寺があり、西650mの地点には、平安時代の住居跡が多数発見された百々遺跡が立地している。

1本のトレンチを設定し、重機で掘削後、人力によって精査し試掘調査を行った。調査の結果、地表から約1.5mの地点で溝状遺構を3条検出した。1号溝は幅約50cm、深さ約25cm、南北方向に走る。2号溝は幅約90cm、深さ約65cm、北東から南へ延びる。3号溝は幅約45cm、深さ25cmである。2号溝と3号溝は同じ覆土が堆積しており、同時期に存在した一連の溝と考えられる。いずれの溝からも遺物が出土しなかったため時期は不明である。保護協議の結果、本工事については掘削深度が遺構に影響しないため、現状保存とし、工事が着工された。

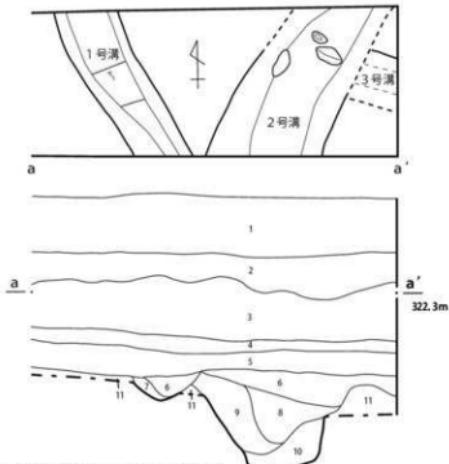


第6図 調査地位置図



第7図 長谷寺遺跡トレンチ配置図 (1/400)

土層説明	
1. 細色土	表土。砂利。
2. 増炭化土	旧表土。グライト化。
3. 細色土	
4. 増炭化土	
5. 黄色土	洪土を含む。
6. 増炭化土	
7. 細色土	洪土を含む。
8. 増炭化土	炭化物を含む。
9. 黄色土	洪土を含む。
10. 細色土	砂、小石を含む。地山ブロックを含む。
11. 明礬増炭化土	粘土。地山。



第8図 第1トレンチ溝状遺構平・断面図 (1/40)

3. 前畠遺跡

調査地 山寺字前畠 70-2、80-1

調査原因 個人住宅

調査期間 平成 15 年 8 月 22 日

対象／調査面積 631.42 m² / 3.2 m²

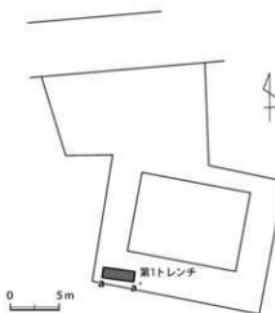
調査概要

調査区は漆川を主とした複合扇状地扇尖部に位置する。調査区周辺での本調査の実績はないが、東南約 300 m には山寺八幡神社や小笠原長清の墓と伝わる地があり、調査区周辺は曹源寺（小笠原長清創建と伝わる廃寺）の推定値の一つとされている。

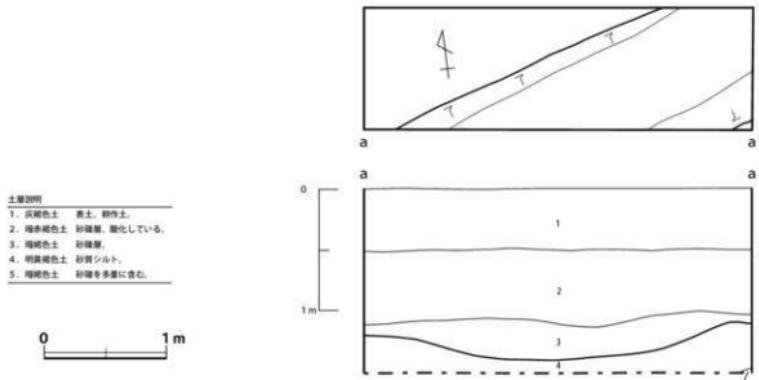
1 本のトレンチを設定し、重機で掘削後、人力によって精査し試掘調査を行った。調査の結果、地表から約 1.1 m の地点で溝状遺構を 1 条検出した。溝は幅約 115cm、深さ約 20cm、北東方向から南西方向に走る。保護協議の結果、本工事については掘削深度が遺構に影響しないため、現状保存とし、工事が着工された。



第9図 調査地位置図



第10図 前畠遺跡トレンチ配置図 (1/500)



第11図 第1トレンチ平・断面図 (1/40)

4. 徳永・御崎遺跡第2地点

調査地 徳永 1672-1

調査原因 個人住宅

調査期間 平成15年12月9~18日

対象/調査面積 636.6 m² / 11.16 m²

調査概要

調査区は御勅使川扇状地扇端部に位置する。調査区の東側には扇状地と氾濫原を区画する浸食崖が南北に走り、遺跡はこの崖上に立地する。調査区の南側では平成12年の調査によって縄文時代後期の敷石住居が発見されている。

合計2本のトレンチを設定した。調査の結果、浄化槽の設置箇所である第1トレンチで古墳時代後期の堅穴住居を検出した。また、第1、2トレンチの明褐色粘土層から縄文時代後期の土器片を発見した。

第1トレンチ

1号住居址

形状/規模 遺存状態は良好で、確認面から床面まで深さ約60cmである。遺構が調査範囲外へ続くため、形状、規模は不明である。

床面 硬化面は検出されなかった。細かな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。わずかに明褐色粘土を貼って床が作られている。

柱穴/壁溝 検出できなかった。竈正面に直径約25cm、深さ約38cmを測る円形の土坑を1基検出した。覆土は暗褐色土を少量含む明褐色土である。位置関係から柱穴ではなく、いわゆる「貯蔵穴」ととらえたい。

竈 明褐色粘土で造られた両袖基部が残存している。竈正面および右袖前方から大振りの石を2

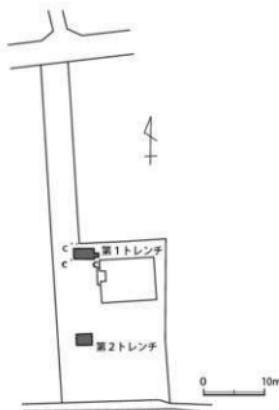
個検出した。竈の袖石あるいは天井石として利用されていた可能性がある。ただし袖石を埋め込んだピットは両袖とも検出できなかった。竈内には焼土が厚く堆積し、竈中央に石の支脚が残されていた。煙道は住居東側奥壁から屋外へ、トンネル状に1.3m延びている。煙道の底面はほぼ全面赤く焼けていた。

堆積状況 住居上層に堆積していた黒褐色土(2層)を取り除くと、擂り鉢状のくぼみとなった。2層はほぼ均一な土質で、下層の7層や9層とは明らかに色調、土質が異なっている。住居が廃棄された後、ある一定期間くぼみとして存在し、その後2層により比較的短時間で住居が埋没したと推測される。

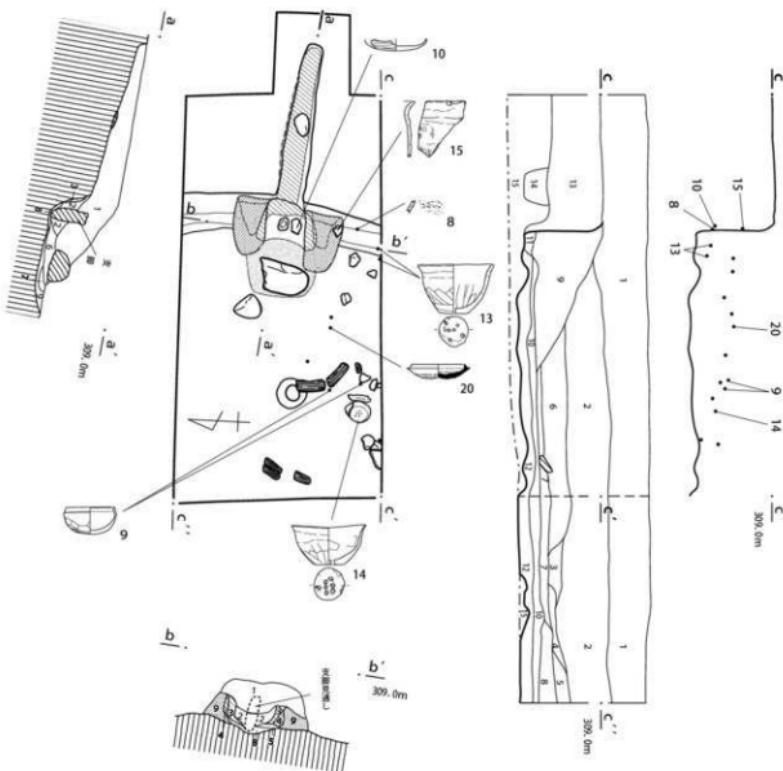
床面直上には焼土、炭化物層(7・8層)が住居全体に広がっており、炭化した木片も数点検出した。



第12図 調査位置図



第13図 徳永・御崎遺跡第2地点
トレンチ配置図 (1/800)



焼失家屋と考えられる。検出した焼土、炭化物の量は、上屋が全焼したほどの量ではない。消失したのは上屋一部であるか、火災後片付けられた可能性がある。

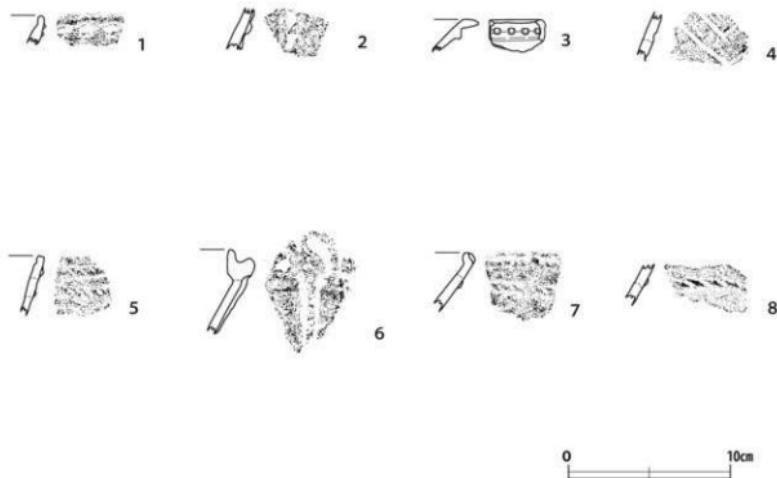
遺物分布状況 覆土2層から出土遺物の量は比較的少なくいずれも破片である。床面付近の遺物は竈南側からトレンチ南壁際にかけてまとめて出土した。

遺物 鬼高式土器師の环や椀、甕、ほぼ完形の甕が2点出土した。須恵器では环や环蓋を検出した。

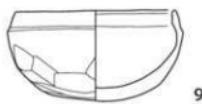
また、第1、2トレンチ双方とも住居の地山である明褐色粘土層から縄文時代後期、堀之内式土器が出土した。

総括

本調査の結果、古墳時代後期の集落が御動使川扇状地北部の扇端部、浸食崖上で初めて発見された。南1.9kmの地点には、後期古墳おつき穴古墳が立地する。本調査範囲は狭小で、発見した住居跡は1軒のみのため、おつき穴古墳との直接的なつながりを述べるには資料が十分ではない。しかし、遺跡周辺に古墳後期の集落が広がっていることはほぼ確実であり、墓域と集落との関係や古墳時代の扇状地扇端部の土地利用を考える上で本資料は貴重な発見となった。なお、縄文時代後期の遺物についての意味や位置づけは、徳永・御崎遺跡第3地点で総括する。



第15図 出土遺物 (1/3)



9



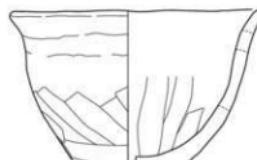
10



11



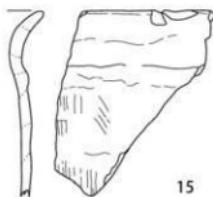
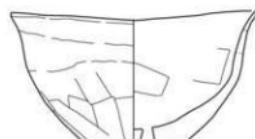
12



13



14



15



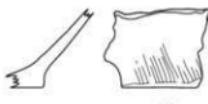
16



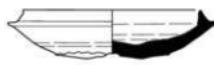
17



18



19



20



21



第 16 図 出土遺物 (1/3)

第5表 徳永・御崎遺跡第2地点土器観察表（第15・16図）

出土 地点	番号	注記名	種 别	器 様	製作技法	胎 土	色 調	焼成	残存率
1トレ	1	TM2.1 トレ・地山	縄文土器	深鉢	外周刻み隆線	やや粗、白色粒子	赤褐色（外） 橙色（内）	良	口縁破片
1トレ	2	TM2.1 トレ・地山	縄文土器	深鉢	外周刻突隆線	やや粗、白色粒子、明赤褐色（外） にぶい橙色（内）	良	破片	
1トレ	3	TM2.1 トレ・地山	縄文土器	深鉢	外周刻突文	やや粗、白色粒子	橙色	普通	口縁破片
1トレ	4	TM2.1 住	縄文土器	深鉢	外周L R 縄文、沈線	やや粗、白、黒色 粒子	淡黄褐色（外） 橙色（内）	良	破片
1トレ	5	TM2.1 住・力	縄文土器	深鉢	外周隆線 内面沈線	やや粗	褐灰色（外） 灰黄褐色（内）	普通	口縁破片
1トレ	6	TM2.1 住・床下	縄文土器	深鉢	外周円形刺突、隆帯、刻み	やや粗、白色粒子	褐灰色	普通	口縁破片
1トレ	7	TM2.1 住・下・明	縄文土器	深鉢	外周瘤状突起、刻み隆線	やや粗、白、黒色 粒子	明赤褐色	良	口縁破片
1トレ	8	TM2.1 住・14	縄文土器	深鉢	外周刻み隆線	やや粗、白色粒子	淡黄褐色	普通	破片
1号住	9	TM2.1 住・3他	土師器	碗	外周底部ヘラケズリ	やや密、白、黒色 粒子	灰黄褐色（外） 黑色（内）	普通	ほぼ完形
1号住	10	TM2.1 住・16	土師器	环	外周底部ヘラケズリ	密、赤色粒子	にぶい褐色	普通	底部 3/4
1号住	11	TM2.1 住・下	土師器	环	外周底部ヘラケズリ	密、赤色粒子	褐灰色	普通	底部破片
1号住	12	TM2.1 住・下・明	土師器	环	外周底部ヘラケズリ	密、赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	底部破片
1号住	13	TM2.1 住・18他	土師器	瓶	外周ヘラケズリ、ナデ 内面ヘラナデ	やや粗、白色粒子	橙色	普通	口縁一部欠損
1号住	14	TM2.1 住・1他	土師器	瓶	外周ヘラケズリ、ナデ 内面ヘラナデ	やや粗、白色粒子	橙色	普通	口縁一部欠損
1号住	15	TM2.1 住・15	土師器	甕	外周タテハケ	やや粗、白色粒子	にぶい赤褐色	良	口縁～頸部 破片
1号住	16	TM2.1 住・下・力 シ	土師器	甕	外周ナデ	やや粗、白、赤色 粒子	褐色	普通	口縁破片
1号住	17	TM2.1 住	土師器	甕	外周ハケ	やや粗、白、赤色 粒子	橙色	良	口縁破片
1号住	18	TM2.1 住・下・明	土師器	甕		やや粗、白、赤色 粒子	橙色	良	口縁破片
1号住	19	TM2.1 住・下・明	土師器	甕	外周ハケナデ	粗、白、黒色粒子	灰黄褐色（外） 黄褐色（内）	普通	底部破片
1号住	20	TM2.1 住・5	須恵器	环	口クロ整形	やや密、白色粒子	灰色	良	約 1/2
1号住	21	TM2.1 住・下・力 シ他	須恵器	环盖	口クロ整形	密、白色粒子	灰色	良	破片



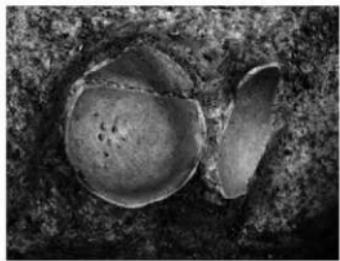
1号住居址（北から）



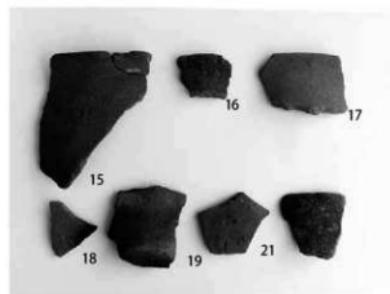
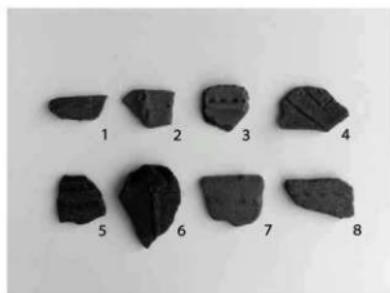
1号住居址（西から）



1号住居址甌出土状況



1号住居址甌出土状況



出土遺物

5. 寺部村附第6遺跡（第II地点）

調査地 寺部 1868 他

調査原因 県道

調査期間 平成 15 年 12 月 10 日、11 日

対象／調査面積 630 m² / 18.9 m²

調査概要

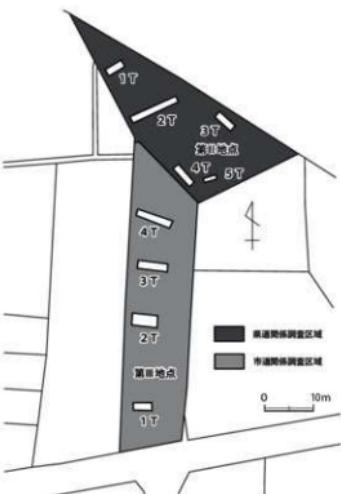
調査対象地点は、御勅使川扇状地の扇端線から 350 m ほど扇尖側に位置する。現在の寺部集落に北接し、扇状地末端の湧水線以南の所謂田方地域と扇状地上の旱魃地帯である原方地域の境界線に占地する。

寺部村附第6遺跡は、今回の調査と同様新山梨環状道路建設に伴い、平成 12 年度～15 年度にかけて発掘調査が実施されており（第I地点）。平成 15 年度に報告書刊行済）、古墳時代前期の住居址、平安時代後半の住居址を中心に、古墳時代中期の円形周溝墓などが検出されている。

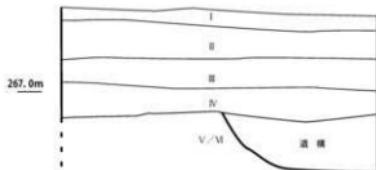
試掘対象範囲には東半を中心立木が残っており、これを避けるように 4 本のトレンチ（第1～第4トレンチ）を設定した。このうち第4トレンチから平安時代後半の土器を作った遺構を検出した。その後遺構の広がりを確認するため第5トレンチを設定したところ、ここでも溝状の遺構を検出するに至った。そのため、事業主体である山梨県新環境・西関東道路建設事務所と南アルプス市教育委員会は、事後の対応について協議し、今回の事業計画地を対象として、遺跡記録保存のための本調査を実施することで合意した。本調査は、平成 16 年 1 月 23 日から平成 16 年 3 月 3 日にかけて行ない、実質調査日数は 28.0 日であった。本調査の結果、古墳時代前期の土坑 1 基、平安時代後半の井戸址 2 基、平安時代後半～中世の溝跡 5 条などを検出した。報告書は平成 16 年度末に刊行予定である。



第 17 図 調査地位置図



第 18 図 寺部村附第6遺跡第II地点
トレンチ配置図 (1/1,000)



第 19 図 基本層序柱状図 (1/40)

土層明細

- I 固褐色土 表土。砂礫多く含み綈滅しない。
- II 棕色土 砂礫多く含む。
- III 黒褐色土 砂礫多く含む。
- IV 暗褐色土 砂礫多く含む。本層下部に鉄構造認定となる。
- V/VI 黑褐色粘土 (V) ところにより砂礫層 (VI) となる。



6. 御勅使川堤防址群

調査地 六科 1588-12、1588-11

調査原因 携帯電話用鉄塔

調査期間 平成 15 年 12 月 11 日

対象／調査面積 164 m² / 4.8 m²

調査概要

調査区は御勅使川扇状地の扇央部、現在の御勅使川の右岸に位置する。調査区の西約 800 m には御勅使川の治水遺構として著名な国指定史跡の「将棋頭」があり、周辺にかすみ堤壙が多く遺存する。

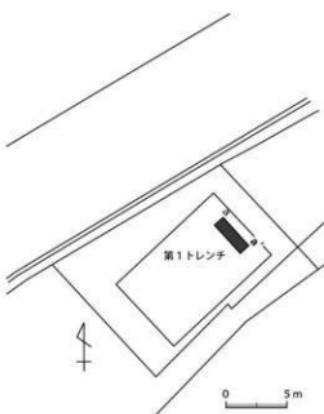
当調査区は北東方面へ突き出るかすみ堤に南接する位置にあたり、堤帶の川面側の基底部への影響が懸念されることから試掘調査を実施した。

1 本のトレンチを設定し、重機で掘削後、人力によって精査し試掘調査を行った。調査の結果、地表から約 2.0 m の地点で、堤防造成時の一部とみられる砂質シルト層が検出された。

保護協議の結果、本工事については掘削深度が造構面直上となるため、文化財担当者の立ち会いのもと着工された。

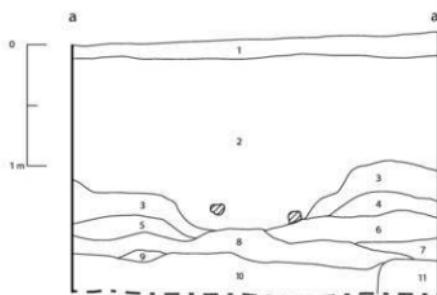


第 20 図 調査地位置図



第 21 図 御勅使川堤防址群トレンチ配置図 (1/400)

土層説明	
1. 明茶褐色土	表土
2. 緑褐色土	埋土、砂礫層
3. 緑灰色土	砂礫層
4. 緑褐色土	砂礫層、埴縫主体
5. 緑褐色土	砂礫層、砾少量に含む
6. 黄褐色土	泥炭、粘性あり、しまりや中弱
7. 黄褐色土	砂礫、粘性なし、しまりなし
8. 黄褐色土	泥炭、粘性あり、しまりや中弱、砾少量含む
9. 緑褐色土	砂礫シルト層、初期の開墾を複数含む
10. 緑褐色土	泥炭シルト層、粘性あり、しまりあり、腐化物含む
11. 緑褐色土	砂質シルト層、粘性あり、しまりあり、腐化物含む



第 22 図 第 1 トレンチ断面図 (1/40)

7. 寺部村附遺跡他

調査地 寺部 681 他

調査原因 大型複合店舗

調査期間 平成 16 年 2 月 12 日～3 月 31 日

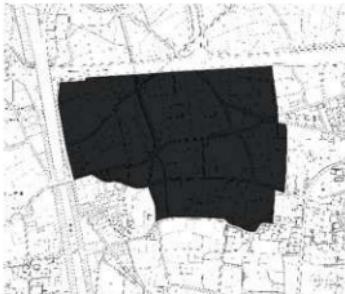
対象／調査面積 121,000 m² / 124 m²

調査概要

調査地は御動使川扇状地扇尖部に位置する。現在の寺部集落西側に位置し、扇状地末端の湧水線以南の所謂田方地域と扇状地上の旱魃地帯である原方地域の境界線に古地する。調査地は寺部村附遺跡や流間遺跡、向第 2 遺跡、溝呂木道上第 4 遺跡、北林第 2 ・ 第 3 遺跡など、多くの遺跡が立地、集中する地域である。

本年度は主に開発範囲の外周に計画された道路部分を対象に 31 本のトレンチを設定し、試掘調査を行った。調査の結果、溝状遺構や竪穴状遺構、竪穴住居等を検出した。

平成 17 年 3 月現在開発計画が協議中であり、計画の進捗状況に合わせて、対象地内の試掘調査を随時実施する予定である。



第 23 図 調査地位置図



トレンチ全景（南から）



トレンチ全景（東から）

8. 寺部村附第6遺跡（第III地点）

調査地 寺部 1924-7 他

調査原因 南アルプス市道1級1号線道路改良事業

調査期間 平成16年3月10、11日

対象／調査面積 497 m² / 50 m²

調査概要

調査対象地点は、御勅使川扇状地の扇端線から350 mほど扇央側に位置する。現在の寺部集落に北接し、扇状地末端の湧水線以南の所謂田方地域と扇状地上の旱魃地帯である原方地域の境界線に占地する。

寺部村附第6遺跡は、新山梨環状道路建設に伴い、

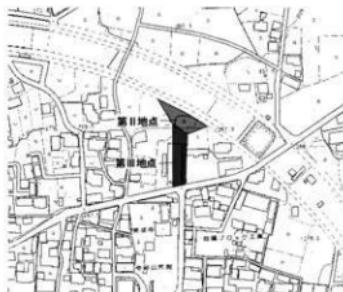
平成12年度～15年度にかけて発掘調査が実施され

ており（第I地点。平成15年度に報告書刊行済）、古墳時代前期の住居址、平安時代後半の住居址を中心に、古墳時代中期の円形周溝墓などが検出されている。

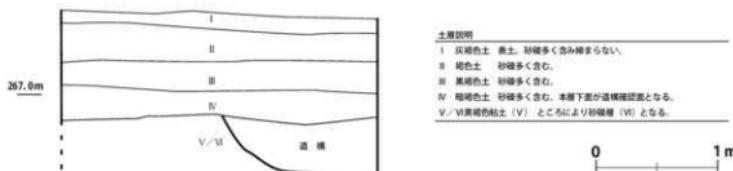
試掘調査対象範囲の大部分は、資材倉庫として利用されており、これを撤去後調査を実施した。

調査に際しては、調査対象範囲に対して4本のトレンチを設定した。この内、第1～第3トレンチについては、表層以下安定した土壤堆積が認められず、基本層序の殆どを砂～砂礫層が占めるとともに、旧資材倉庫の基礎等による著しい土層の搅乱が認められ、遺構・遺物の検出は認められなかった。第4トレンチにおいては、遺物は検出されなかったものの、若干の遺構が検出された。

これを受け、事業主体である南アルプス市建設部と南アルプス市教育委員会は、事後の対応について協議を行ったが、試掘調査では、第4トレンチから時期不明の遺構が若干検出されたに留まるが、既に本調査を実施した同遺跡第II地点で検出された溝状遺構が、今回の調査範囲に伸びていることが明らかであったので、第2トレンチ以北を対象として遺跡記録保存のための本調査を実施することで合意した。本調査は、平成16年6月22日から平成16年8月6日にかけて行ない、実質調査日数は32.0日であった。本調査の結果、平安時代後半の竪穴住居址1基、溝跡5条などを検出した。報告書は平成16年度末に刊行予定である。



第24図 調査地位置図



第25図 基本層序柱状図 (1/40)

9. 徳永・御崎遺跡第3地点

調査地 徳永字御崎 1664-2

調査原因 個人住宅

調査期間 平成 16 年 3 月 9 ~ 22 日

対象 / 調査面積 378.84 m² / 7 m²

調査概要

調査区は御動使川扇状地扇端部に位置する。調査区の東側には扇状地と釜無川氾濫原を区画する浸食崖が南北に走り、遺跡はこの崖上に立地する。調査区の北側には平成 12 年の調査によって縄文時代後期の敷石住居が発見されており、さらに北側の徳永・御崎遺跡第2地点では古墳時代後期の竪穴住居址が検出されている。

平安時代

1号住居址

形状 / 規模 遺存状態は良好である。大部分が調査区外となるため、正確な規模、形状は不明であるが、検出した北東角部分から、矩形を呈すると推測される。調査区の南東端で焼土が見られたことから、住居の東壁に竪窓が構築されていると考えられる。

遺物 甲斐型环、甕の小片が住居東壁南側の床面付近から出土した。遺物の出土状況も、平安時代に一般的な東竪窓を示唆している。

縄文時代

1号住居址

形状 / 規模 調査範囲が狭小なため、規模、主軸は不明である。形状は円形を呈し、柄鏡形住居の可能性も考えられる。

入口 炉から西側に平坦な石面があり、西側に延びる可能性がある。

炉 調査区内に続くため形状、規模の特定はできないが、調査区内で判断する限り方形石囲炉で、内法寸法で東西約 50cm、深さ 38cm を測る。焼土の堆積は見られない。

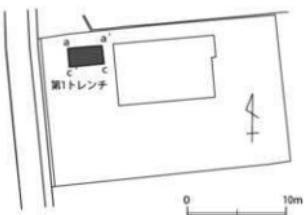
敷石 トレンチ南側で弧状に石が並んでおり、縁石と考えられる。しかしこれを縁石とすると炉の位置と近接しすぎている。トレンチ北東や西側にまとまって見られる石はおのおのレベル差があり、炉の上にも平坦な石が置かれていた。こうした点から、縁石と炉は別々の遺構で複数の遺構が重なっている可能性がある。また、トレンチ内で石が半円形に並んでいると考えた場合、炉がほぼ中心となり、1軒の住居である可能性もある。

柱穴 敷石下に浅い土坑を確認した。柱穴になるかは不明である。

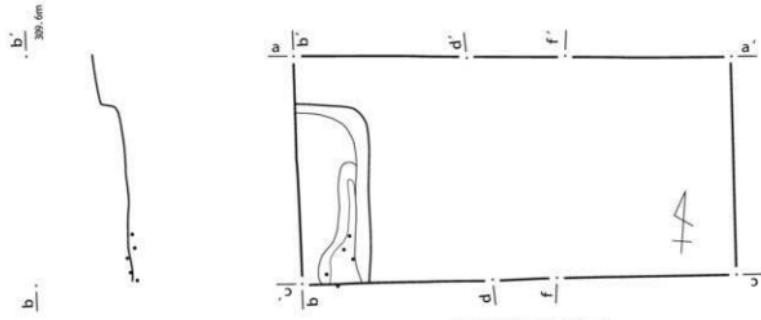
遺物 土器では壺之内 1 ~ 2 式が発見された。いずれも破片である。土製品としては、完形の匙形土製品が出土した。石器では石棒、磨石・凹石、多孔石、磨製石斧が出土した。



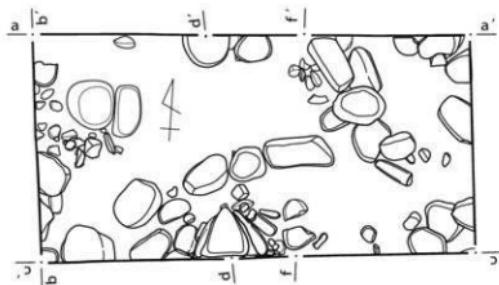
第 26 図 調査地位置図



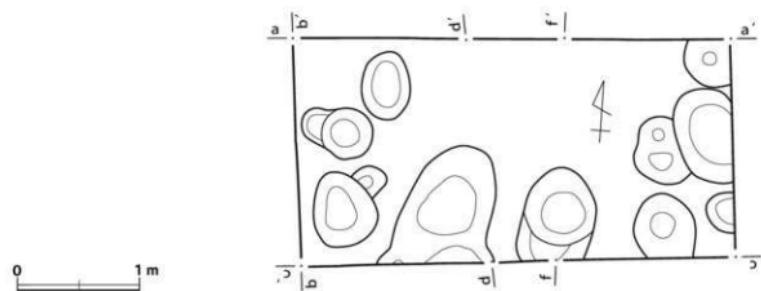
第 27 図 徳永・御崎遺跡第3地点
トレンチ配置図 (1/500)



平安時代住居址平面図

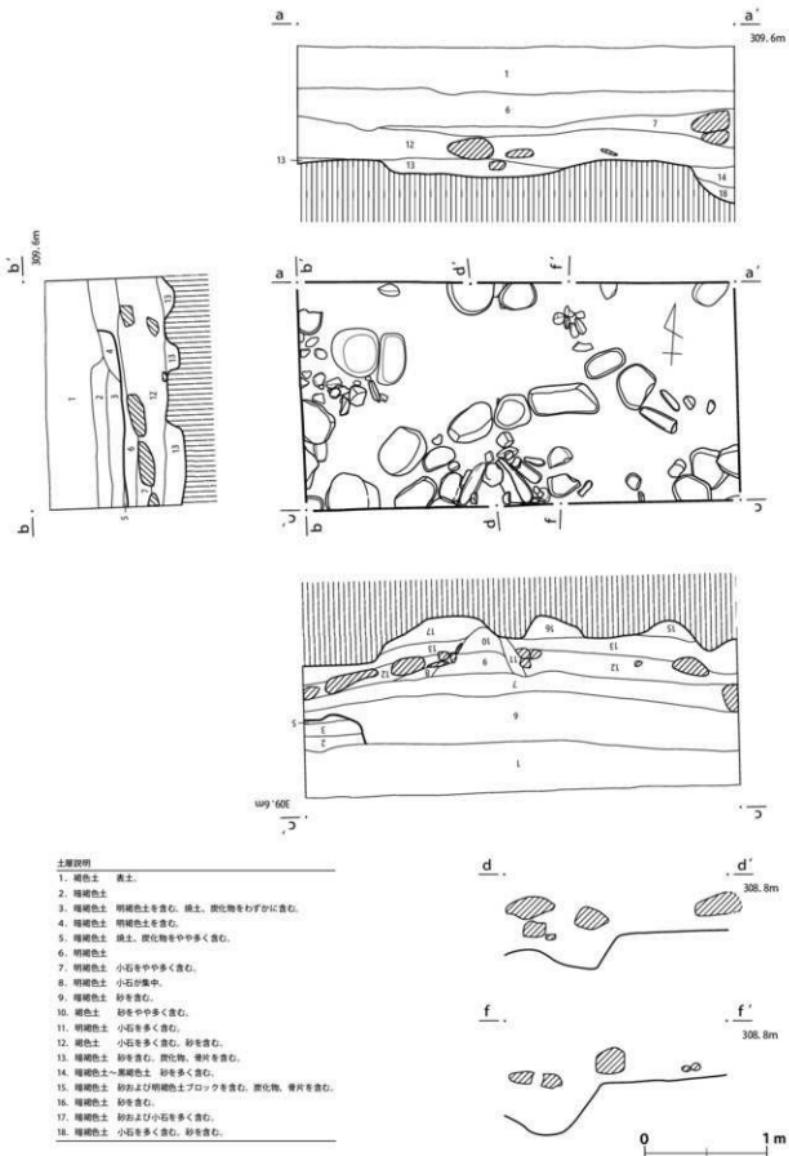


敷石住居址上層平面図

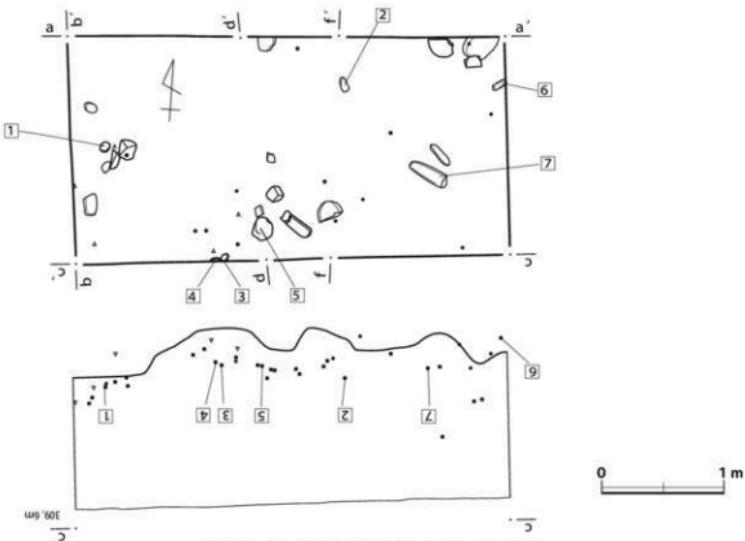


敷石住居址堀方平面図

第28図 平安住居址および敷石住居址平・断面図 (1/40)



第29図 敷石住居址平・断面図 (1/40)



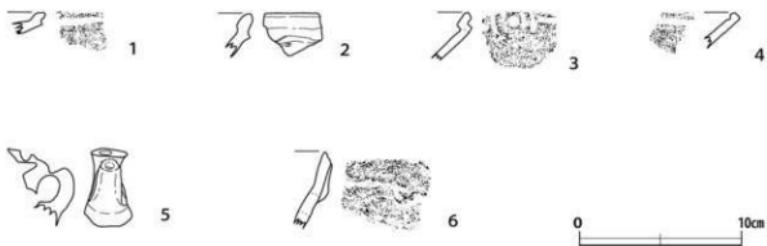
第30図 敷石住居址遺物分布平・断面図 (1/40)

遺物で注目されるのは匙形土製品（1）である。長さ10.4cm、幅4.5cm、高さ5.5cmを数え、半円形で片側に短い突起が付けられている。体部は中空で、幅約3.2～1.0cm、長さ7.8cmの開口部がある。開口部の一部は両側が掘ままで一部狭くなっており、注ぎ口の印象を受ける。開口部を上、半円部分を下にして置くと、静止できず一見転がってしまいそうだが、半円部分の一部がわずかに平坦に仕上げられており、開口部を上にしても置けるように作られている。突起はひねりを加え頂部をへこませた独特の形状で、開口部を上にして右手で土製品を持つと、人差し指の指先がぴったりと突起のへこみにあたるようになっている。また突起には孔が開けられ、紐で下げられた可能性がある。外面には一部赤で彩色されたと思われる痕跡が見られる。県内で類例を探したが管見の範囲では同じような遺物は発見されていない。動物を模して作られた土製品との見方もできるが、本報告では形状や厚さから匙形土製品とした。器壁が薄い点や先述した特徴から、日常的な道具というよりも主に液体を注ぐ祭り用の道具と推測される。

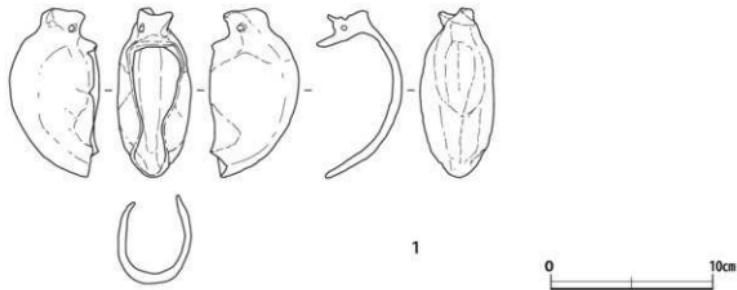
総括

本調査およびこれまで調査した徳永・御崎遺跡、徳永・御崎遺跡第2地点はいずれも浄化槽部分の調査であり、狭小な調査範囲にもかかわらず、3地点で縄文時代の配石遺構、敷石住居跡、古墳時代後期・平安時代の住居跡などが発見されている。徳永・御崎遺跡周辺では、上八田下村遺跡、上八田堂前遺跡でも敷石住居跡および配石遺構が発見されており、徳永・御崎遺跡の東端である侵食崖から上八田下村遺跡までの約280m間に、縄文時代後期の集落が広範囲に営まれていた可能性が高い。

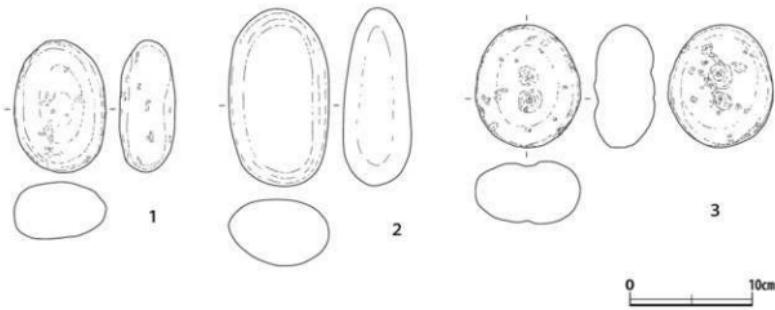
調査範囲が限定される数mの調査でも重要な発見があり、そうした小さな調査結果の積み重ねが、地域の歴史を紐解く上では必要不可欠である。狭小な範囲の工事でも注意を払う必要があろう。なお、保護協議の結果、住宅部分については掘削が遺構に影響が及ばない深さのため、現状保存とし、工事が着工された。



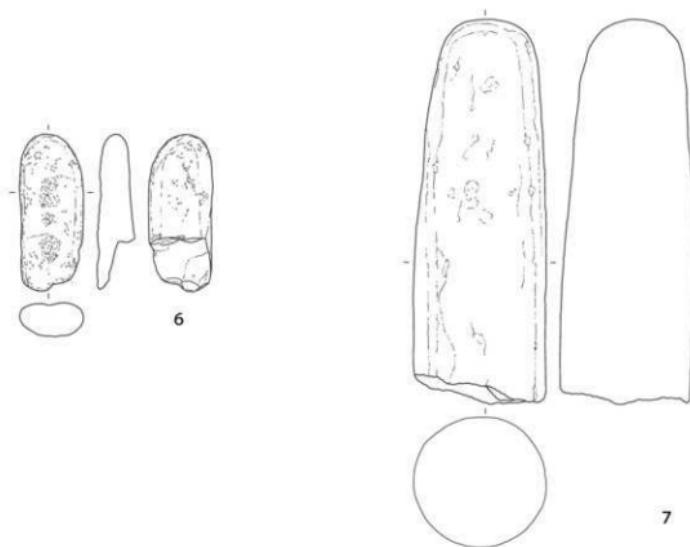
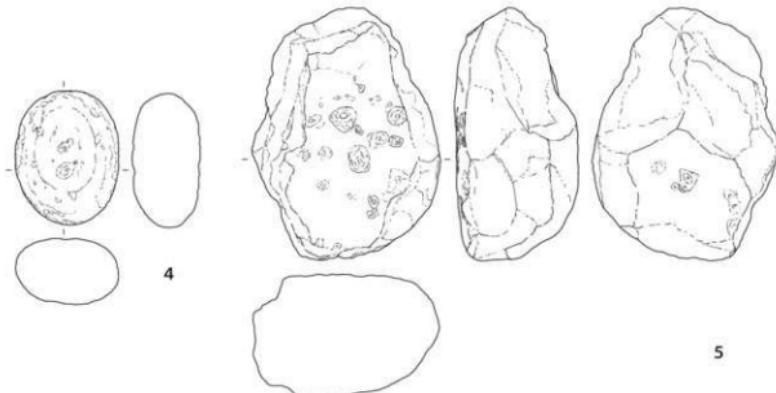
第31図 出土遺物 (1/3)



第32図 出土遺物 (1/3)



第33図 出土遺物 (1/4)



第34図 出土遺物 (1/4)

第6表 徳永・御崎遺跡第3地点土器観察表（第31図）

出土 地点	番号	注記名	種 別	器 種	製作技法	部位	胎 土	色 調	焼成	残存率
敷石住居	1	TM3. S	縄文土器	深鉢	外面ナデ	口縁	やや粗、白、黒色 粒子	褐色（外） 灰黄褐色（内）	普通	口縁破片
敷石住居	2	TM3. S	縄文土器	深鉢	外面ナデ	口縁	やや粗、白色粒子	浅黄褐色	普通	口縁破片
敷石住居	3	TM3. W	縄文土器	深鉢	外面円形刺突、沈線	口縁	やや粗、白色粒子	浅黄褐色	普通	口縁破片
敷石住居	4	TM3. W	縄文土器	深鉢	外面ナデ 内面沈線	口縁	やや粗、白色粒子	褐色	普通	口縁破片
敷石住居	5	TM3. W	縄文土器	注口土器	円形刺突	把手	やや粗、白色粒子	橙色	普通	把手破片
敷石住居	6	TM3. 4土	縄文土器	深鉢	外面隆蒂	口縁	やや粗、白、黒色 粒子	浅黄褐色	普通	口縁破片

第7表 徳永・御崎遺跡第3地点土製品観察表（第32図）

出土 地点	番号	注記名	器 種	胎土	色調	焼成	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	残存率
敷石住居	1	TM3. 6	匙形土製品	やや粗、白色粒子、長石	褐色	普通	10.4	4.5	5.5	完存

第8表 徳永・御崎遺跡第3地点石器観察表（第33・34図）

出土 地点	番号	注記名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	残存率
敷石住居	1	TM3. 5	磨石	10.9	7.6	4.6	547	安山岩	完存
敷石住居	2	TM3. 6	磨石	14.6	8.3	5.6	1,033	安山岩	完存
敷石住居	3	TM3.20	磨石・凹石	11	8.5	5.6	723	安山岩	完存
敷石住居	4	TM3.25	磨石・凹石	10.0	8.6	5.1	542	安山岩	完存
敷石住居	5	TM3.17	多孔石	20.6	15.4	10.1	3,400	ディサイト	完存
敷石住居	6	TM3.24	石斧・凹石	12.9	5.2	3.0	278	砂岩	一部欠損
敷石住居	7	TM3. 4	石棒	31.6	10.9	10.9	5,370	安山岩	根本部分欠損



第1トレンチ全景（西から）



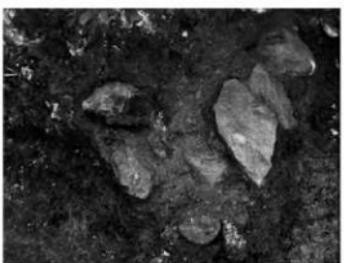
第1トレンチ平安竪穴住居址断面（北東から）



敷石住居址上層（西から）



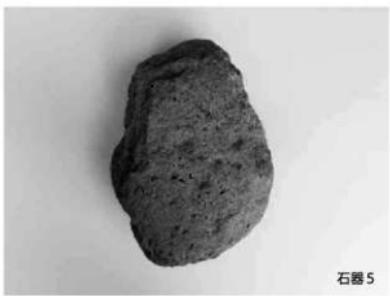
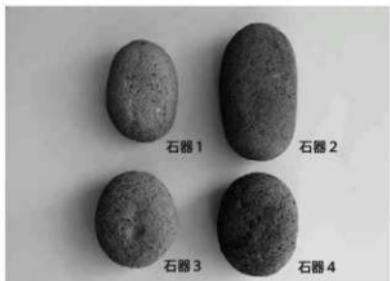
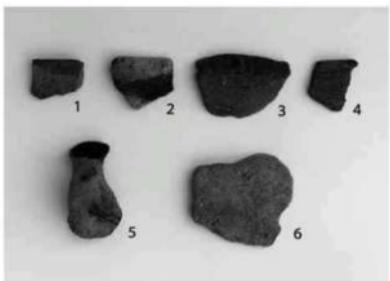
炉出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



出土遺物

第Ⅲ章 平成 16 年度遺跡試掘調査概要

1. 野牛島・立石下遺跡

調査地 野牛島 2623 他

調査原因 宅地造成(分譲住宅)

調査期間 平成 16 年 4 月 21 日

対象／調査面積 726.79 m² / 15.1 m²

調査概要

調査区は御勅使川扇状地扇端部に位置する。調査地から東へ約 350 m の地点には御勅使川伏流水の湧水を堰き止めて造られた能蔵池がある。調査地北側では立石下遺跡や野牛島・大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡、大塚遺跡など遺跡が密集しており、奈良・平安時代の集落や中世の区画溝、墓等が発見調査されている。

合計 3 本のトレンチを設定し、重機による表土の掘削後、人力で精査、確認する試掘調査を行った。

調査の結果、第 2 トレンチで地表から約 80 cm の深さから溝状遺構を発見した。調査範囲内では東西に延びる。溝北側が調査区外へ続くため、溝の幅、形状は不明であるが、確認した範囲では溝の断面形はすり鉢状を呈する。遺物は出土せず、時期は不明である。

保護協議の結果、住宅建設の掘削深度が遺構に影響を与えないことから現状保存とし、工事が着工された。

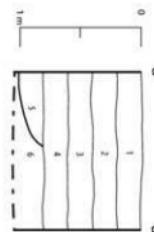
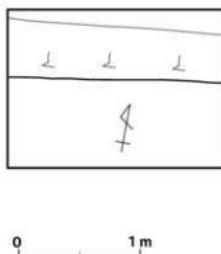


第 35 図 調査地位置図



第 36 図 野牛島・立石下遺跡トレンチ配置図

(1/800)



土壤図例	
1.	灰褐色土
2.	黄褐色土
3.	黄灰色土
4.	暗褐色土
5.	暗褐色土
6.	明褐色土

第 37 図 野牛島・立石下遺跡第 2 トレンチ平・断面図 (1/40)

2. 野牛島・立石下遺跡

調査地 野牛島 2592 他

調査原因 集合住宅

調査期間 平成 16 年 8 月 23 日

対象／調査面積 1,685 m² / 31.22 m²

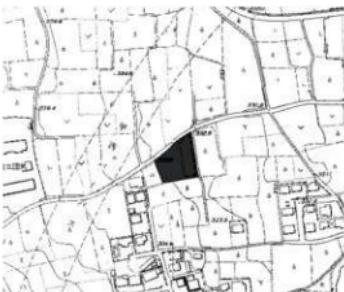
調査概要

調査区は御動使川扇状地扇尖部に位置する。調査地周辺は遺跡が密集しており、特に北側では立石下遺跡、野牛島・大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡、大塚遺跡など発掘調査が数多く行われ、奈良・平安時代の集落や中世の区画溝、墓等が発見されている。

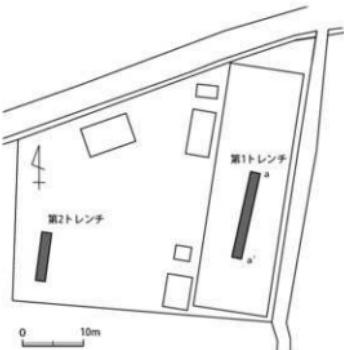
合計 2 本のトレンチを設定し、重機による表土の掘削後、人力で精査、確認する試掘調査を行った。第 1 トレンチでは溝状遺構を 5 条および土坑 1 基を確認した。遺構確認面は地表から 60 ~ 70cm 下である。遺構の覆土は褐色土で明黄褐色土ブロックを含んでいる。1、2 号溝は 3、5 号溝を切って、東西に走っている。一方、3、4 号溝はほぼ並行して南北方向に延びている。5 号溝は北北東方向へ延び、1、2、3 号溝に切られている。なお、遺物は検出されなかった。

第 2 トレンチでは、地山層である明黄褐色土層の直上に水田床土が堆積する。層の堆を観察すると、水田層によって明黄褐色土の上層つまり遺構確認面が削平されていることがわかる。そのため、第 2 トレンチでは遺構、遺物ともに検出できなかった。

保護協議の結果、共同住宅建設の掘削深度が遺構に影響を与えないことから現状保存とし、工事が着工された。



第 38 図 調査地位置図



第 39 図 野牛島・立石下遺跡トレンチ配置図
(1/800)



第 40 図 基本層序柱状図 (1/40)



第 41 図 第 1 トレンチ平面図 (1/100)

3. 加賀美条里遺構

調査地 加賀美 2810-3 他

調査原因 宅地造成(分譲住宅)

調査期間 平成17年2月10~22日

対象/調査面積 2,311 m² / 39.37 m²

調査概要

調査区は滝沢川扇状地上の微高地に位置する。調査地南西には加賀美遠光館跡と伝えられる法善寺が位置する。また、調査区北西約480mの地点では塔頭「福寿院」に比定されている二本柳遺跡や、中部横断道建設に伴い調査され、寺院跡が発見された二本柳遺跡が位置する。二本柳遺跡からは中世の遺物や溝状遺構、方形区画遺構等が発見されている。一方二本柳遺跡では中世水田や近世水田跡が発見されている。

合計2本のトレンチを設定し、重機で掘削後、人力によって精査し試掘調査を行った。

第1トレンチ

盛り土下には植物遺体を多量に含んだシルト層が互層に堆積しており、遺構、遺物は発見できなかった。

第2トレンチ

溝状遺構1条、竪穴状遺構2基、方形区画遺構を発見した。

溝状遺構

幅60~80cm、深さ約20cmを測り南北に延びる。溝の西側には一定間隔で杭が打たれている。覆土には褐色灰色土の砂質シルトが堆積しており、水路跡と推測される。

1号竪穴状遺構

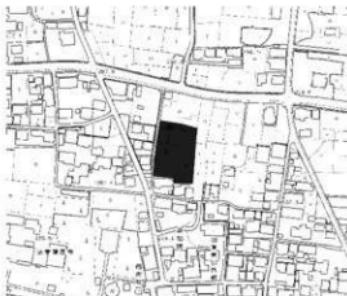
1号竪穴状遺構の形状は、確認した範囲内では隅丸矩形をとる。壁はほぼ垂直に立ち上がる部分とオーバーハングして立ち上がる部分がある。覆土は焼土、灰を含む黒色の炭化物が主体で、この層から大量の瓦片が出土した。炭化物層直下に堆積していた灰白色~燈色粘土層は凹凸が激しく人為的に貼られた可能性がある。

2号竪穴状遺構

1号竪穴状遺構の東側に位置する。確認した範囲内では隅丸矩形をとる。遺構はゆるやかに中央へ向かって窪んでおり、浅いすり鉢状を呈する。遺構には焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積しており、この層から多数の瓦片や焼成が十分でない粘土塊が出土した。

方形区画遺構

竪穴状遺構を掘り下げると、植物遺体を含む黒褐色土層(15層)が上手状に掘り残されてできた方形の区画遺構を発見した。2条の土手により3区画に分かれている。土手は幅約20cm、高さ約



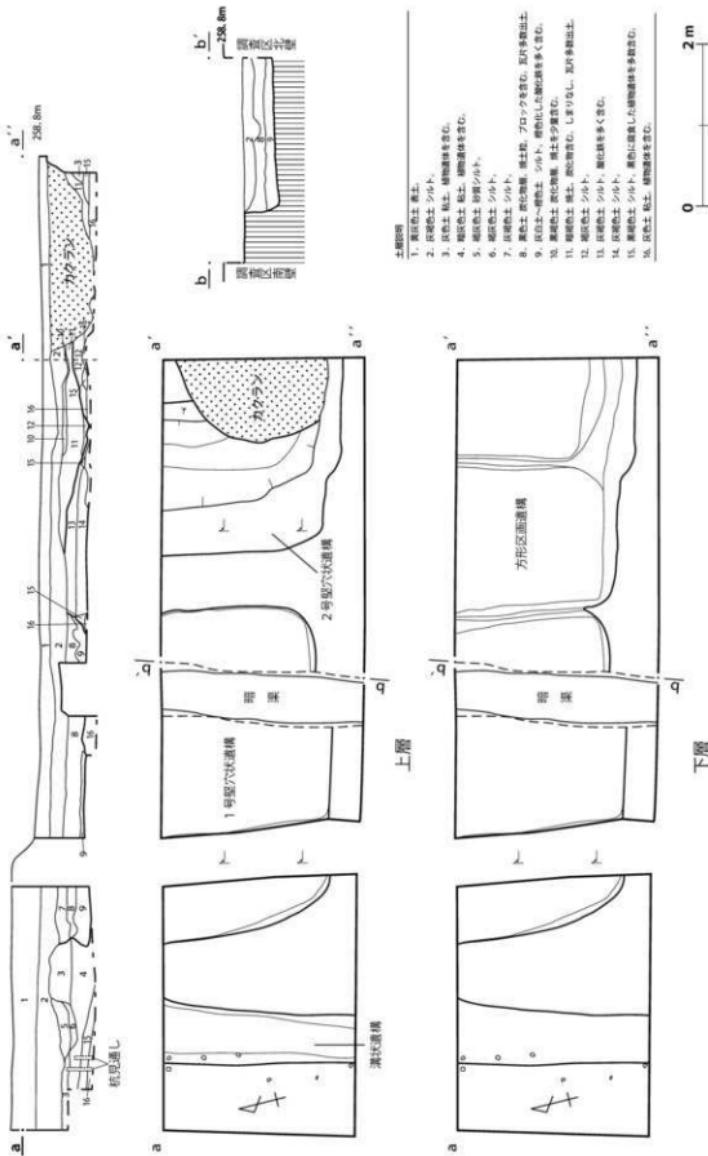
第42図 調査地位置図



第43図 加賀美条里遺構トレンチ配置図

(1/1,000)

第44図 溝状遺構および竪穴状遺構・断面図 (1/60)



10cmで、2条平行して南北に延びている。

総括

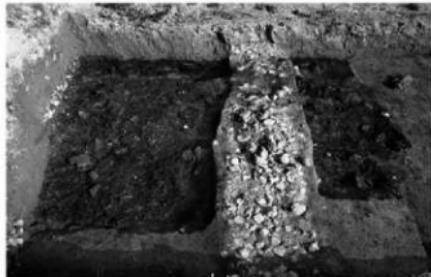
溝状遺構については、覆土には褐色土の砂質シルトが堆積しており、水路跡の可能性がある。杭は土留めとして利用されていたと考えられる。

1、2号竪穴状遺構では、焼土、炭化物を主体とする覆土から多数の瓦や未焼成の粘土塊等が出土した。瓦が廃棄されたと推測される。

方形区画遺構は、形状が類似した遺構が山梨県埋蔵文化財センターによって調査された二本柳遺跡でも発見されており、水田あるいは粘土採掘坑と推定されている。二本柳遺跡は、本調査地点から西北370mの地点に位置しており、いずれも滝沢川扇状地微高地に立地している。本遺構を水田とするには人為的に畦が造られておらず土手の構造も弱い。一方、粘土採掘坑とするにも確かに根拠があるわけではない。今後検討すべき課題である。

文化財保護方針

本調査の結果、幕末から近代の溝状遺構や竪穴状遺構、方形区画遺構が発見された。これまで加賀美の瓦やその生産に係る遺構、遺物が発掘調査された例はなく、竪穴状遺構から出土した瓦や未焼成粘土塊は、近代とはいえ瓦生産で名を馳せた加賀美の歴史を考える上で貴重な資料である。工事に際しては埋蔵文化財に対し適切な保護措置をとる必要がある。



第2トレンチ1号竪穴状遺構炭化物層
および瓦出土状況（南から）



第2トレンチ1号竪穴状遺構（南から）



第2トレンチ2号竪穴状遺構瓦出土状況
(北から)



第2トレンチ2号竪穴状遺構（東から）



第2トレンチ2号竪穴状遺構断面



第2トレンチ全景（東から）



第2トレンチ全景（西から）

4. 辻遺跡

調査地 山寺 390 他

調査原因 宅地造成(分譲住宅)

調査期間 平成 17 年 3 月 17 日～24 日

対象／調査面積 1,227 m² / 56.93 m²

調査概要

調査対象地点は、深沢川と漆川によってそれぞれ造り出された二つの小扇状地の間に立地している。調査地東側 500 m には、小笠原氏館跡があったと伝えられる小笠原小学校が位置する。

調査地にはスプリンクラーがまだ埋設されているため、それを避けるように合計 5 本のトレーンチを設定した。調査の結果、第 2、3、4 トレーンチで溝状遺構、第 5 トレーンチで土坑等の遺構を検出した。

1 号溝状遺構

第 2 および第 4 トレーンチで地表下約 20 ~ 40 cm の地点からそれぞれ溝状遺構を検出した。双方とも黄褐色土の地山を掘りこんで造られている。幅 2.7 ~ 3.6 m、深さ 0.5 m を測る。第 2 トレーンチでは東西方向にのび、第 3 トレーンチでは南東から北西方向へ延びている。溝の規模、形状から同一の遺構とした。その場合、溝は矩形となる。断面形は逆台形状で床面は凹凸がある。

2 号溝状遺構

第 4 トレーンチの北側で検出した。1 号溝状遺構を切って造られている。遺構全体を確認していないため、正確な形状は不明である。他の遺構の可能性もあるが、本稿では溝状遺構として報告する。

3 号溝状遺構

第 3 トレーンチの北側で検出した。遺構全体を確認していないため、正確な形状は不明である。他の遺構の可能性もあるが、本稿では溝状遺構として報告する。

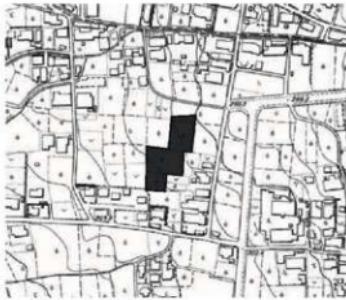
4 号溝状遺構

第 4 トレーンチ南側で 1 号溝状遺構と並行している溝を検出した。幅約 35 ~ 60 cm、深さ 30 cm を測る。土坑

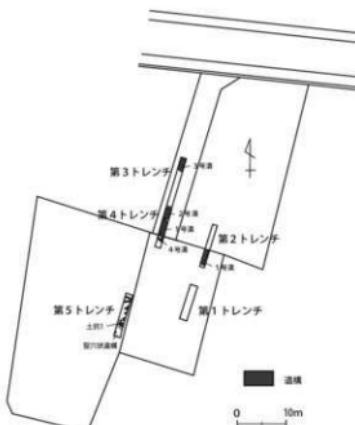
第 5 トレーンチでまとまって土坑を検出した。覆土は暗褐色土と黒褐色土にはっきりと分かれる。

遺物 溝状遺構や土坑から古墳時代前期の甕片等が出土した。

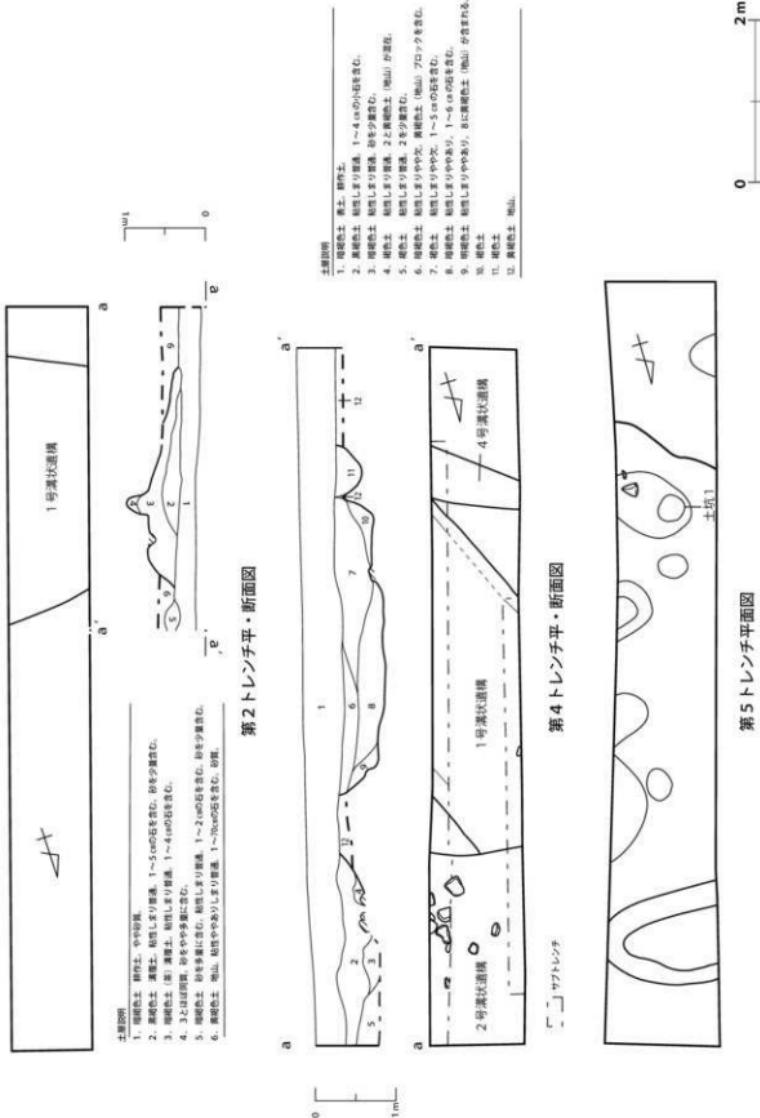
現在、発見された遺構の保存について、工事主体者と市教育委員会とで保護協議中である。



第 45 図 辻遺跡位置図



第 46 図 辻遺跡トレーンチ配置図 (1/1,000)





第2トレンチ1号溝状遺構（南から）



第3トレンチ3号溝状遺構（南から）



第2トレンチ1号溝状遺構西壁断面

第IV章 百々・上八田遺跡発掘調査報告

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 経緯と経過

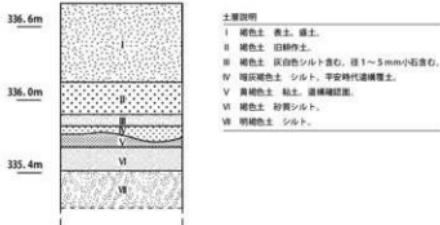
富岡修氏（以下工事主体者という）によって個人専用住宅建設が計画された南アルプス市上八田820-3番地は、南アルプス市埋蔵文化財包蔵地SN-3百々・上八田遺跡に該当する。このため平成16年10月13日付けで埋蔵文化財発掘の届出が南アルプス市教育委員会を経由して県教育委員会に提出された。本調査地点は山梨県埋蔵文化財センターが調査を行った百々遺跡2区東側に隣接する（第49図）。百々遺跡では平安時代の竪穴式住居址や溝状遺構、土坑等多数の遺構や土師器、錘、八稜鏡等の遺物が発見されており、建設地点にも遺構が存在することが予想された。本工事は個人住宅の新築であるが、湿式柱状地盤改良を行うため掘削深度が深く、現状の工事方法では遺構が破壊される。このため、市教育委員会と工事主体者との協議の結果、遺跡の破壊が予想される個人住宅建物部分について発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとなった。

調査期間 平成16年10月25日～平成16年11月11日

対象／調査面積 492.2 m² / 47.12 m²

(2) 基本層序

調査区は御勅使川扇状地の地形に沿って、西から東へ傾斜する緩斜面上に位置する。I層は盛土である。II層は褐色土で、畑の耕作土である。その下には灰白色シルトをラミナ状に含む褐色土層が堆積している。IV層は暗灰褐色シルト層で平安時代の遺物包含層であり、遺構の覆土でもある。V層は黄褐色粘土層でいわゆる地山層である。VI層は砂質シルト、VII層は明褐色シルト層である。



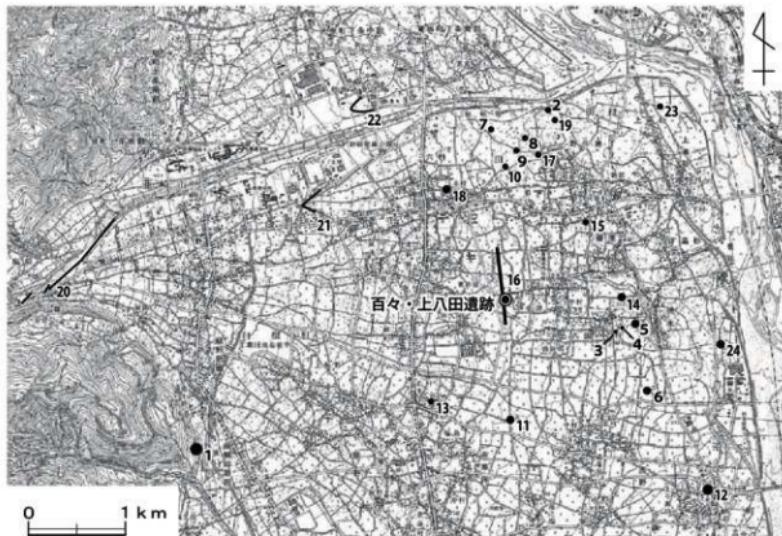
第48図 基本層序柱状図 (1/40)

第2節 地理・歴史環境

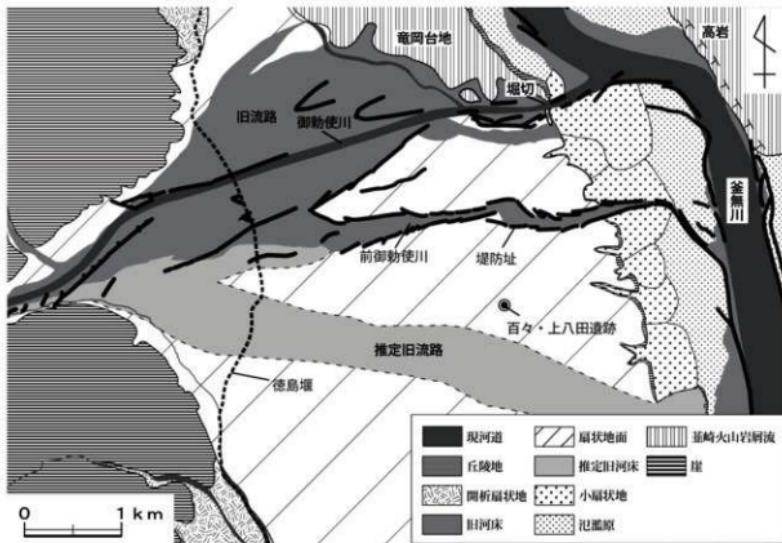
(1) 地理環境

遺跡周辺の地形

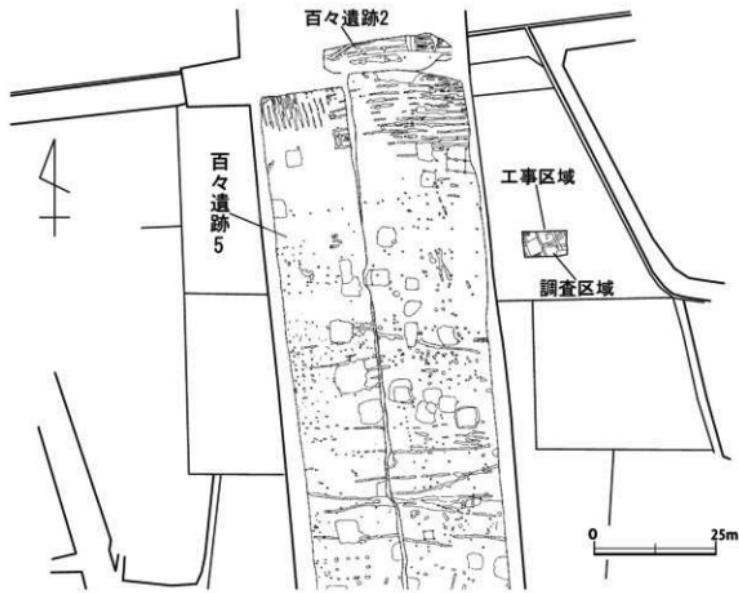
百々・上八田遺跡が立地する御勅使川扇状地は御勅使川が長い年月をかけて流路変遷を繰り返した結果形成された扇状地で、総面積40 k m²を誇る。扇状地東側は南流する釜無川によって削り取られ、扇状地より低い氾濫原が形成されている。釜無川による浸食の結果、御勅使川扇状地と氾濫原の間には高さ10~20mにおよぶ崖が作り出され、両者を区画する明瞭な境界となっている（第49・50図）。こ



第49図 百々・上八田遺跡周辺地形図・周辺の遺跡 (1/50,000)



第50図 御勤使川扇状地地形分類図 (1/50,000)



第51図 百々・上八田遺跡（調査地点）と百々遺跡位置図（1/1,000）

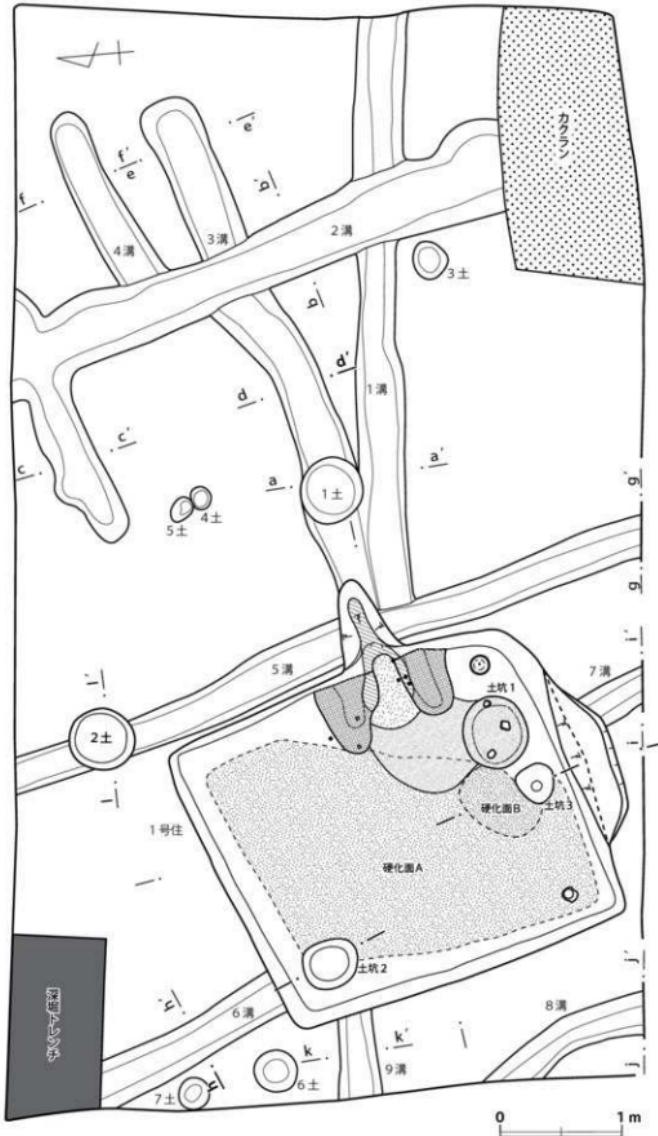
の崖線は野牛島地区の赤山から生じ、西野を経由し加賀美中条付近で消滅している。この崖下は地下水となった御勅使川の伏流水が地上に湧出する地点となり、崖線にそって湧水池が分布している。

調査地点はこの御勅使川扇状地扇端部に位置している。北には県道甲斐芦安線とほぼ同じルートに地元で「前御勅使川」と呼ばれている御勅使川の旧流路がある。前御勅使川は現在の御勅使川より一つ前の本流で、戦国末から近世初頭にかけて、現在の御勅使川へ流路が変更されたと推定されている。一方調査地南側には、航空写真や中部横断道路の試掘・発掘調査結果から前御勅使川よりさらに古い御勅使川の旧流路が存在したことが明らかとなった。「御勅使川南流路」と名付けられたこの旧流路は、平安時代御勅使川の本流であったと推測されている。調査地点および山梨県文化財センターが調査した百々遺跡は、この二つの旧流路に挟まれた地域に立地している。

（2）歴史環境

本遺跡が位置する御勅使川扇状地北部地域の歴史環境について時代を追いながら見ていきたい（第49図）。

最も古い遺跡として、縄文時代中期の遺物が採取された飯平遺跡（1）や赤山遺跡（2）があげられる。飯平遺跡は巨摩山地の山麓、赤山遺跡は韋崎から続く竜岡台地の南端赤山に位置し、この時期扇状地上ではまだ遺跡が見られない。後期に入ると、山麓・台地上から扇状地末端部へ進出する形跡が認められる。特に徳永、上八田両地区の浸食崖上には、縄文時代後期の遺物や敷石住居が発見された上八田堂前遺跡（3）や上八田下村遺跡（4）、徳永・御崎遺跡（5）が位置しており、広範囲に後期集落が展開



第52図 百々・上八田遺跡全体図 (1/40)

していた様子が伺える。縄文晩期～弥生時代中期では扇状地扇端部からやや西側扇尖部よりの地域に遺跡が確認できる。野牛島地区の大塚遺跡（7）や石橋北屋敷遺跡（8）、立石下遺跡（10）では条痕土器とともに弥生時代中期から後期の土器片が検出されている。また、扇尖部に位置する横堀遺跡（11）でも晚期から弥生時代前期の土器や石器が発見されている。

古墳時代、野牛島地区の大塚遺跡で前期の住居址が6軒検出されている。また榎原・天神遺跡（15）の烟状遺構から前期の高坏が発見されている。扇状地末端部に立地する徳永・御崎遺跡第2地点（本書P 9）では後期鬼高期の住居跡が1軒発見されており、扇状地末端部に後期集落が存在したことが明らかとなった。一方、浸食崖を埋めて形成された小扇状地上には後期古墳のおつき穴古墳（12）がある。現在は1基のみ確認されているだけだが、本来は群集墳であったと考えられる。

奈良時代8世紀中頃から平安時代9世紀中頃には、野牛島地区の大塚遺跡、野牛島・大塚遺跡（9）、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡で多くの豊穴住居址が検出され、広く集落が展開していたことが明らかとなった。扇状地扇端部に目を移すと、坂ノ上姥神遺跡（14）で8世紀の豊穴住居が発見されている。このように9世紀中頃までは野牛島地区とともに、扇状地末端部にも集落が営まれる。

9世紀末から10世紀に入ると状況は一変する。野牛島地区では豊穴住居がほとんど検出されなくなる一方、前御勤使川を挟んだ南側の百々遺跡（16）では、10世紀代を中心とした平安時代の住居址が300軒以上発見されたほか、八稜鏡や石帶、牛馬の獣骨などの遺物が検出され、大規模な集落が営まれていたことがわかった。こうした遺構および出土遺物は、質、量とともに野牛島地区的集落とは異なる様相を示している。前御勤使川右岸に位置する榎原・天神遺跡でも10世紀の住居址が検出されており、また八田村教育委員会が行った遺跡分布調査の結果、百々地区から扇端部かけて舞台遺跡や坂ノ上姥神遺跡など多数の遺跡が確認された。こうした状況から、8世紀中頃～9世紀中頃には御勤使川左岸の野牛島地区および右岸の扇状地扇尖から末端部を中心に集落が営まれ、10世紀に入ると右岸扇尖部の百々地区から扇端部にわたる広い範囲に集落が展開したと推測される。

参考文献

- 河西 学 2000 「石橋北屋敷遺跡周辺の地形環境」『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集 山梨県教育委員会他
- 小林健二他 2000 「石橋北屋敷遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集 山梨県教育委員会他
- 森藤秀樹 1999 「村内遺跡詳細分布調査報告書」 八田村文化財調査報告書 第1集 八田村教育委員会
- 2000 「野牛島・大塚遺跡」 八田村文化財調査報告書 第2集 八田村教育委員会他
- 2001 「榎原・天神遺跡」 八田村文化財調査報告書 第3集 八田村教育委員会
- 2002 「徳永・御崎遺跡」 八田村文化財調査報告書 第4集 八田村教育委員会
- 2003 「平成13・14年度埋蔵文化財調査報告書」 八田村文化財調査報告書 第6集 八田村教育委員会
- 白根町誌編纂委員会 1969 「白根町誌」 白根町
- 高木勇夫・中山正民 1983 「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学地理学部自然科学研究所研究紀要』第18号
- 1987 「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」『東北地理』39
- 新津 健 1997 「大塚遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集 山梨県教育委員会他
- 畑 大介他 1998 「山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第152集 山梨県教育委員会他
- 八田村誌編集委員会 1973 「八田村誌」 八田村
- 保坂康夫 1999 「御勤使川扇状地の古地形と遺跡立地—中部横断道の試掘調査の成果から—」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 2002 「御勤使川の流路変遷にかかる最近の考古学的知見」『甲斐路』第100号
- 米田明訓他 2001 「立石下遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第189集 山梨県教育委員会他

第3節 発見された遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址（第52・53・54・55・56図、第9表、写真図版1・2）

遺存 遺存状態は良好で、確認面から床面まで約80cmを数える。

形状 圓丸方形プランを呈す。

規模 東西軸は上端で2.7m、下端2.55m、南北軸は上端で3.4m、下端2.8mを測る。

床面 床は貼り床で、橙色～灰色土粘土で作られている。壁際を除いて住居内全体に硬化面を検出した（硬化面A）。特に住居南側、ステップ状遺構の前面はやや床が盛り上がり、非常に固くしまった硬化面となっている（硬化面B）。断面を見ると硬化面Aは3層（24～26層）からなり、竈から流れ込んだ土も踏み固められていることがわかる。

出入口 住居南壁中央に外側に地山を掘りこんだ段差を検出した。この段差の前面には土坑3があり、その周辺には硬化面Bが広がっている。こうした点から、この段差は出入り口施設であり、最初に住居床面へと降りる場所が硬化面Bと考えられる。

柱穴／壁溝 なし。

竈 東壁やや南よりの位置に造られている。天井部および袖上部は残存していない。袖はおもに明褐色粘土で造られている。袖の心材に石等は用いられていない。竈内には焼土が堆積し、煙道まで赤く焼けていた。煙道は東壁から約12cm付近で垂直に立ち上がっている。

遺物 遺物の出土量は住居址の残りが良好な割りに少なく、1cm以上の土器片および鉄滓2点を含めて総数約30点である。垂直分布でみると、上層では遺構確認時に土器の細片を検出ただけで、多くの遺物が床面附近で検出された。水平分布でみると竈内から土坑1附近に集中している。

1は遺構確認時に発見した土師器の甕、2は环である。3は土師器の环、4、5は土師器の甕である。6は須恵器の环蓋で、竈南から逆さの状態で出土した。8、9は鉄滓で、竈正面に向かって左袖上から出土した。

土坑 1号住居址内で3基の土坑を発見した。以下、土坑1～3についてそれぞれ記述してゆく。

土坑1 竈南側に隣接して掘り込まれたいわゆる「貯藏窓」と呼ばれる土坑である。形状は円形を呈する。長軸（東西）が約60cm、短軸（南北）が50cm、深さ約8cmを測る。土坑の上層には、竈から流れ込んだ黒褐色土層が堆積していた。

土坑2 住居北西隅で小さな土坑を検出した。形状はほぼ円形を呈する。長軸（南北）約45cm、短軸（東西）40cm、深さ約15cmを測る。

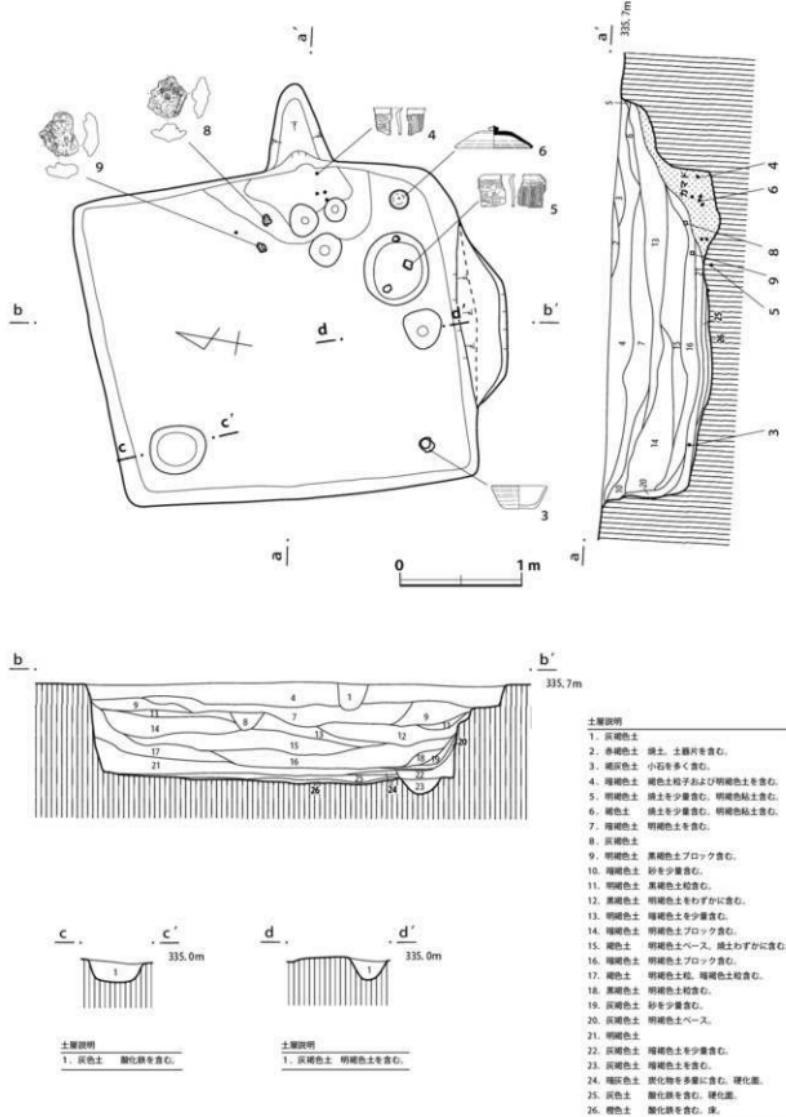
土坑3 住居中央やや南よりの地点から、直径約30cm、深さ約15cmの小さな円形土坑を検出した。土坑は出入り口施設と考えられる段差のちょうど真下に位置しており、梯子を掛けるための支脚跡と推定される。

(2) 溝状遺構（第52・57・58図、写真図版2）

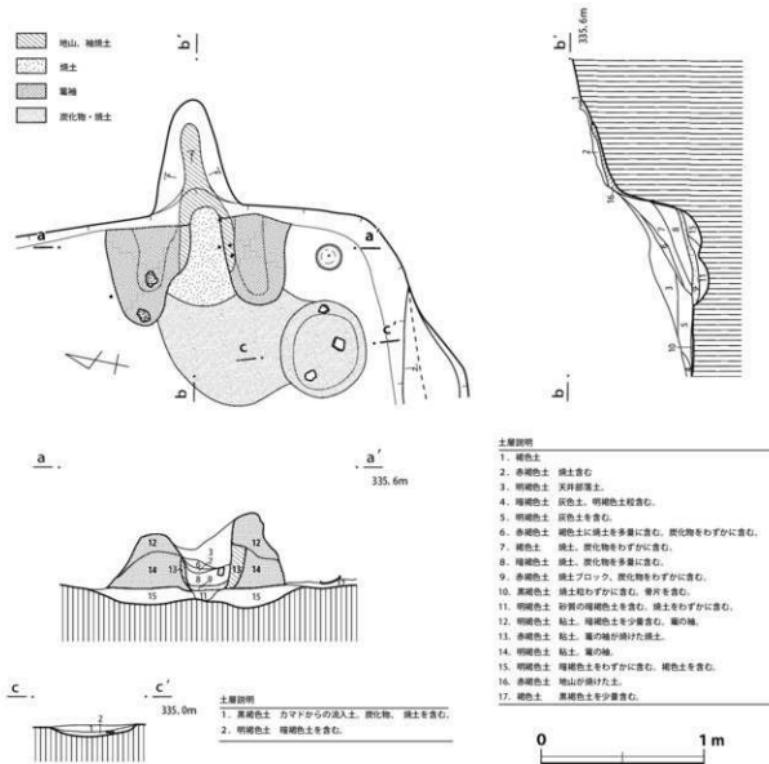
本調査では溝状遺構を合計9条発見した。幅が狭く浅い形状から、隣の日々遺跡で検出された畠状遺構と推定される。日々遺跡と同様に溝は1号住居址に切られている。溝から遺物は出土しなかった。

1号溝

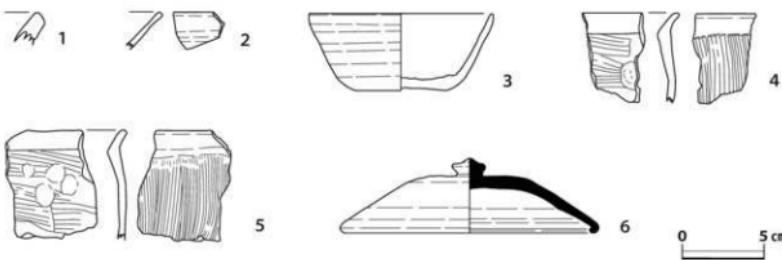
幅約40cm前後、深さ約8cmを数える。西から東へまっすぐに延び、底面標高は西端で335.489m、



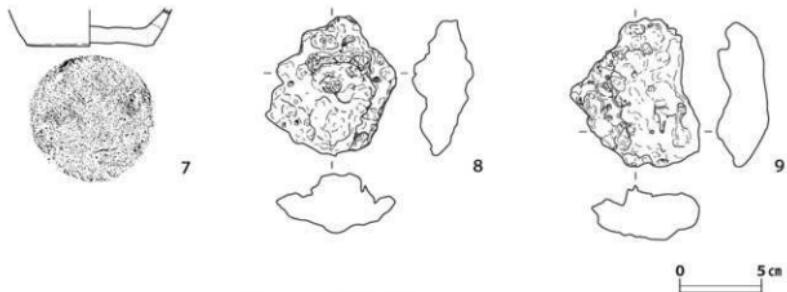
第 53 図 1号住居址および土坑 2・3 堀方平・断面図 (1/40)



第54図 1号住居址竈および土坑1平・断面図 (1/30)



第55図 出土遺物 (1/3)



第56図 出土遺物 (1/3)

第9表 百々・上八田遺跡土器観察表 (第55・56図)

出土地点	番号	注記名	種別	器種	製作技法	胎土	色調	焼成	残存率
造構確認面	1	DU.イカク	土師器	甕	ナデ	やや粗、金雲母、白色粒子	赤褐色	普通	口縁破片
1号住	2	DU.1住.イカク	土師器	甕	ロクロ整形	密、赤色粒子	褐色	良	口縁破片
1号住	3	DU.1住.9	土師器	甕	ロクロ整形・回転糸切り	密、白色粒子	灰白色	普通	底部完存～口縁1/4
1号住	4	DU.1住.2	土師器	甕	ナデ、外面タテハケ 内面ヨコハケ・指頭痕	普通、金雲母 にふい赤褐色(内)	赤褐色(外) にふい赤褐色(内)	普通	口縁破片
1号住	5	DU.1住.7	土師器	甕	ナデ、外面タテハケ 内面ヨコハケ・指頭痕	普通、金雲母 にふい赤褐色	にふい赤褐色	普通	口縁破片
1号住	6	DU.1住.5	須恵器	甕蓋	外表面回転ヘラケズリ	密、白色粒子	灰色	良	完存
1号土坑	7	DU.1土	土師器	甕	ロクロ整形・回転糸切り	やや粗、白色粒子	褐色(外) にふい褐色(内)	普通	底部破片

東端で 335.445m を測る。2、3、5号溝を切っており、1号住居址、1号土坑に切られている。

2号溝

幅約 40 ~ 80 cm、深さ約 20 cm を数える。北北西から南南東にまっすぐに延びている。底面標高は北端で 335.404m、南端で 335.284m を測る。一方、調査区北壁際では西南方向に延び、溝の底面標高は西端で 335.532 m、東端（南北の溝に交わる手前付近）335.489 m となっている。3、4号溝を切っており、1号溝に切られている。

3号溝

幅約 45 cm 前後、深さ約 10 cm を数える。西から東へ延び、底面標高は西端で 335.491m 東端で 335.465 を測る。1号土坑、1・2号溝に切られている。

4号溝

幅約 35 cm 前後、深さ約 8 cm を数える。西から東へ延び、底面標高は西端で 335.478 m、東端で 335.468 m を測る。2号溝に切られている。

5号溝

幅約 35 cm 前後、深さ約 5 cm を数える。北北西から南南東へ延び、底面標高は北端で 335.559 m、南端で 335.495 m を測る。1号溝、1号住居址に切られている。

6号溝

幅約40cm前後、深さ約9cmを数える。北北西から南南東に延び、底面標高は北端で335.582mを測る。方向、形状から7号溝に続く可能性がある。1号住居址に切られている。

7号溝

幅約30cm前後、深さ約7cmを数える。北北西から南南東に延び、底面標高は南端で335.467mを測る。方向、形状から6号溝に続く可能性がある。1号住居址に切られている。

8号溝

幅約30cm前後、深さ約13cmを数える。北北西から南南東に延び、底面標高は北端で335.573m、南端で335.508mを測る。

9号溝

幅約30cm前後、深さ約5cmを数える。西から東に延び、底面標高は西端で335.583mを測る。

(3) 土坑 (第52・56・57・58図、第9表)

1号土坑

円形で直径約55cm、深さ約22cmを数える。1、3号溝状遺構を切っている。覆土には明褐色粘土や焼土が詰まっており、当初1号住居址竪煙出口と考え精査したが、現地表では住居址煙道と土坑はトンネル状に繋がらなかった。しかし覆土からみても竪の煙出に伴う土坑であると考えられる。

遺物 土坑中央に甲斐型甕の底部が伏せられた状態で出土した。

2号土坑

ほぼ円形で、直径約52cm、深さ約19cmを測る。

3号土坑

ほぼ円形で、直径約30cm、深さ約7cmを測る。

4号土坑

直径約15cmの小ピットである。

5号土坑

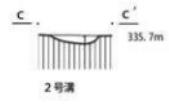
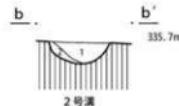
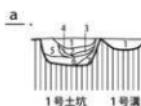
直径約15～22cm楕円形の小ピットである。4号土坑の北に隣接している。

6号土坑

ほぼ円形で、直径約35cm、深さ約13cmを測る。

7号土坑

ほぼ円形で、直径約25cm、深さ約8cmを測る。



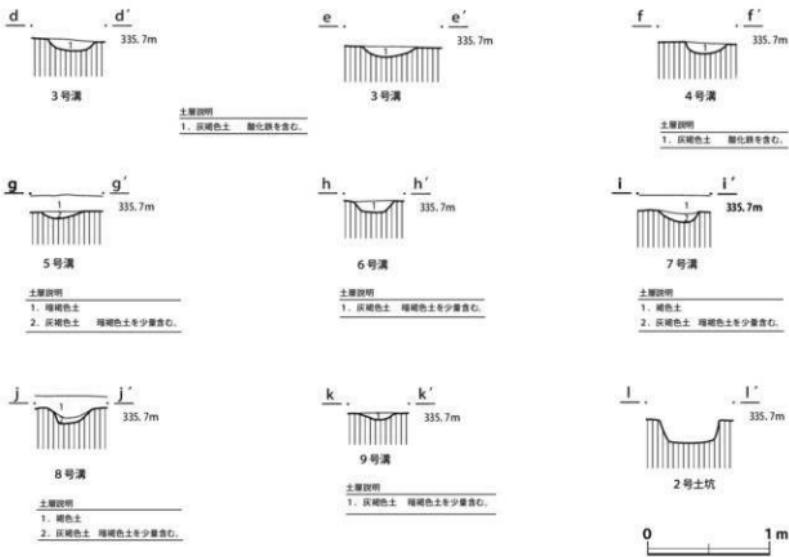
土層説明	
1.	明褐色土
2.	暗褐色土
3.	褐色土
4.	褐灰色土
5.	明褐色土
6.	褐色土
7.	褐色土

土層説明	
1.	明褐色土
2.	暗褐色土

土層説明	
1.	明褐色土



第57図 1、2号溝、1号土坑断面図 (1/40)



第 58 図 3～9号溝、2号土坑断面図 (1/40)

第4節 総括

本調査によって百々遺跡に統く古代の住居跡および畝状遺構が発見された。両遺構の集落全体における位置づけは百々遺跡の報告を参照していただき、本総括では、調査結果から推測される住居の空間利用についてまとめてみたい。まず入口については、すでに述べたように南壁際となる。竪内、土坑1および壁際を避けて、床の硬化面が住居中心部分にまんべんなく広がっており、少なくともこの範囲で硬化面を形成するほどの踏みしきが行われたことがわかる。この結果からすぐに就寝スペースの欠如には結びつけられないが、存在していたとしても就寝専用のスペースではなく、かなり踏みしきを伴う行為あるいは作業がその場所で行われていたことになる。住居内の空間利用について明らかにするには、より多くの住居址データを比較検討することが必要であり、比較検討するために床面データ他、住居址での細かな観察、記録化が求められる。



調査区全景（西から）



1号住居址全景（西から）



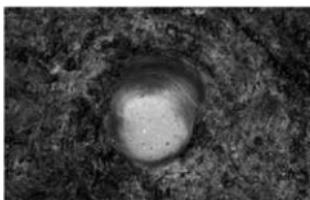
1号住居址竈・遺物出土状況（西から）



1号住居址須恵器灰蓋出土状況



1号住居址出入口施設（東から）



1号住居址坏出土状況

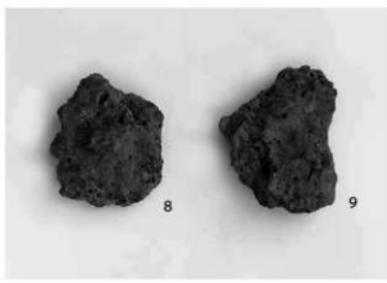
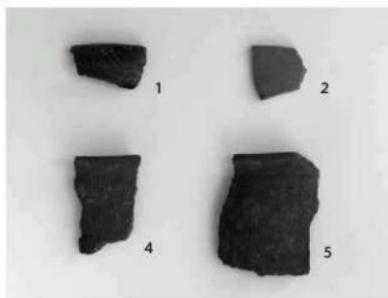
写真図版 2



溝状遺構（東から）



作業風景



出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせい 15・16ねんどまいぞうぶんかさいしくつちょうさほうこくしょ／どうどう・うえはったいせき
書名	平成 15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書／百々・上八田遺跡
シリーズ名	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 10 集
編著者名	斎藤秀樹、田中大輔、保阪太一
編著機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒 400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212 TEL055-282-7777
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 31 日

ふりがな	どうどううえはったいせき
所収遺跡	百々・上八田遺跡
ふりがな	やまなしけんみなみあるぶすしどううえはった 820-3
所在地	山梨県南アルプス市百々上八田 820-3
コード	市町村 19208
	遺跡 SN-3（南アルプス市遺跡番号）
1/25000 地図名	小笠原
北緯	北緯 35° 39' 15"（世界測地系）
東経	東経 138° 28' 26"（世界測地系）
標高	335 m
調査期間	20041022～20041111
調査面積	47.12 m ²
調査原因	個人住宅
種別	散布地
主な時代	平安時代
主な遺構	竪穴住居址 1 軒（平安時代）・溝状遺構 9 条・土坑 7 基
主な遺物	土師器壺・須恵器壺蓋・鉄滓
特記事項	御勅使川扇状地扇央部の集落址

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第10集
山梨県南アルプス市
平成15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書
百々・上八田遺跡

発行日 2005年3月31日
発行者 南アルプス市教育委員会
〒 400-0492
山梨県南アルプス市鮎沢1212
TEL 055-282-7777
印刷所 ほおづき書籍株式会社
〒 381-0012
長野県長野市柳原2133-5
TEL 026-244-0235
FAX 026-244-0210

